

高知県土佐山田町

林 田 遺 跡

1985年3月

土佐山田町教育委員会

林田遺跡発掘調査報告書

高知県香美郡土佐山田町明治地区県営圃場
整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1985年3月

土佐山田町教育委員会



S T - 2

序

国土の各種開発事業が進められ、将来へ向けての新規な構築が盛んに行われている現場で、そこに埋っていた古代文明の息吹きが堀り起こされていることには、意味深長なものがあると思います。それは、私達が未来を志向するとき、過去を忘れては正しい発展はあり得ないという警告であり、温故知新の教えそのものであります。

今度の林田遺跡の発掘もその例に洩れず、圃場整備事業に伴うものであったために、調査条件としては不十分なうらみはありましたが、他ならぬ我々町民の祖先である古代の人々の生活に直接触れることによって、地域社会の生成発展の事実を知り得たことの意義は、深いものがあると思います。

しかも、本調査によって、ヒビノキや田村の遺跡等との関連がより明確となり、県中央部における古代社会の全貌をうかがうに足る、新たな資料を提供し得たことは、大きな収穫がありました。

岡本先生ご指導のもと、県教育委員会の先生方が、豊かな経験と優れた技術を駆使して、予期以上の成果をあげて戴いたことは、学問的にも高い評価を得るものと確信しています。炎熱酷暑の中で、この事業をご完遂下さった先生方に、また、終始暖かいご理解、ご協力を戴いた高知県農林水産部耕地課、南国耕地事務所、土佐山田町明治土地改良区及び地域住民の方々に、衷心より厚く御礼を申し上げます。

昭和60年3月

土佐山田町教育委員会 教育長 坂 本 敏 夫

例　　言

- 1 本報告書は県営明治地区圃田整備事業に伴い、高知県農林水産部耕地課の委託をうけて土佐山田町教育委員会が実施した林田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡は林田カリヤ遺跡とされていたが、南国市田村にカリヤ、北カリヤ遺跡が存在し、混同をさけるために林田遺跡とした。
- 3 発掘調査は1983年6～9月にかけて行ない、整理作業および報告書作成は1984年度に随時行なった。
- 4 発掘調査および整理作業の体制は以下の通りである。

調査団長　坂本敏夫

調査顧問　岡本健児（高知女子大学教授　高知県文化財保護審議会委員長）

調査員　宅間一之（高知県教育委員会文化振興課社会教育主事）

　　〃　　山本哲也（　　〃　　〃　　〃　　主事）

　　〃　　森田尚宏（　　〃　　〃　　〃　　）

事務局　　土佐山田町教育委員会社会教育課

- 5 発掘調査、整理作業、報告書作成にあたっては、調査顧問、岡本健児教授に御指導、御助言をいただき、完成することができた。記して感謝するものである。

6 報告書の執筆は次のとおり分担した。I-宅間、III-1、2(N～Qトレンチ)、IV-1(S T-3,4)-山本、他は森田による。図版作成、写真撮影は森田が行い、編集は土佐山田町教育委員会である。

7 種子の鑑定は高知大学農学部水森通雄教授、および京都府立大学農学部徳岡正三教授を通じ大阪市立大学理学部粉川昭平教授にお願いした。記して感謝するものである。

8 発掘調査においては、地元林田地区、明治土地改良区、南国耕地事務所に全面的協力、援助を受け、高知大学考古学研究会には発掘、整理作業を通じ協力を得たので記して感謝するものである。

9 図中の方位は磁北を示し、遺物写真的番号は実測図の番号と一致する。

目 次

I	調査にいたる経過.....	1
II	位置と環境.....	2
1	位置.....	2
2	歴史的環境.....	2
III	調査経過.....	6
1	試掘調査.....	6
2	トレンチ調査.....	7
3	本調査.....	18
IV	遺構と遺物.....	22
1	住居址.....	22
2	土壤.....	43
3	ピット.....	43
V	総括.....	45

挿図目次

- 第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図
- 第2図 試掘グリッド設定図
- 第3図 トレンチ・調査区設定図
- 第4図 A～F トレンチセクション図
- 第5図 G～L トレンチセクション図
- 第6図 トレンチ・第III調査区平面図
- 第7図 トレンチ出土遺物 (1)
- 第8図 トレンチ出土遺物 (2)
- 第9図 TR-P出土鉄鎌
- 第10図 第I・II調査区平面図
- 第11図 第I・II調査区出土遺物
- 第12図 第III調査区平面図
- 第13図 第III調査区出土遺物
- 第14図 ST-1平面図・断面図
- 第15図 ST-1出土遺物
- 第16図 ST-2平面図・断面図
- 第17図 ST-2出土遺物 (1)
- 第18図 ST-2出土遺物 (2)
- 第19図 ST-2出土遺物 (3)
- 第20図 ST-2出土遺物 (4)
- 第21図 ST-2出土遺物 (5)
- 第22図 ST-2出土遺物 (6)
- 第23図 ST-2出土遺物 (7)
- 第24図 ST-3平面図・セクション図
- 第25図 ST-3出土遺物
- 第26図 ST-4平面図・セクション図
- 第27図 ST-4出土鉄鎌
- 第28図 ST-4出土遺物

図版目次

卷頭図版 ST-2

- | | | |
|------|----------------------|-----------------------|
| 図版1 | 1. 遺跡遠景（西より） | 2. 遺跡近景（南より） |
| 図版2 | 1. 試掘グリッドNo.5 | 2. 試掘グリッドNo.10 |
| 図版3 | 1. 試掘グリッドNo.15 | 2. 試掘グリッドNo.17 |
| 図版4 | 1. 遺跡近景・トレンチ | 2. 遺跡近景・トレンチ |
| 図版5 | 1. Aトレンチ遺構検出 | 2. Aトレンチ遺構完掘 |
| 図版6 | 1. Bトレンチ遺構完掘 | 2. Bトレンチピット遺物出土状態 |
| 図版7 | 1. A・Bトレンチ全景 | 2. CトレンチST-2検出状態 |
| 図版8 | 1. Fトレンチ（東より） | 2. Fトレンチ（西より） |
| 図版9 | 1. Gトレンチ（北より） | 2. Gトレンチ（南より） |
| 図版10 | 1. Hトレンチ（東より） | 2. Mトレンチ（北より） |
| 図版11 | 1. Iトレンチ（南より） | 2. Kトレンチ（北より） |
| 図版12 | 1. Kトレンチ遺物出土状態 | 2. Kトレンチ遺物出土状態 |
| 図版13 | 1. 第I調査区全景（南より） | 2. 第I調査区ピット群 |
| 図版14 | 1. ピット遺物出土状態 | 2. ピット遺物出土状態 |
| 図版15 | 1. 遺物出土状態 | 2. ピット遺物出土状態 |
| 図版16 | 1. ST-1検出状態 | 2. ST-1完掘状態 |
| 図版17 | 1. ST-2調査風景 | 2. ST-2検出状態 |
| 図版18 | 1. ST-2遺物出土状態 | 2. ST-2床面遺物出土状態 |
| 図版19 | 1. ST-2完掘状態 | 2. ST-2鉄鎌出土状態（23図-1） |
| 図版20 | 1. ST-2鉄鎌出土状態（23図-2） | 2. ST-2鉄鎌出土状態（23図-7） |
| 図版21 | 1. ST-2鉄鎌出土状態（23図-8） | 2. ST-2鉄鎌出土状態（23図-6） |
| 図版22 | 1. ST-2鉄鎌出土状態（23図-9） | 2. 住居址外鉄鎌出土状態（23図-15） |
| 図版23 | 1. ST-2鍋出土状態（23図-12） | 2. ST-2鍋出土状態 |
| 図版24 | 1. ST-2ピット遺物出土状態 | 2. ST-2ピット出土遺物 |
| 図版25 | 1. ST-2遺物出土状態 | 2. ST-2土製品出土状態 |
| 図版26 | 1. 第III調査区近景（北より） | 2. 第III調査区全景 |
| 図版27 | 1. 遺構検出 | 2. ST-3完掘状態 |
| 図版29 | 1. ST-3遺物出土状態 | 2. ST-3炭化物出土状態 |
| 図版29 | 1. Pトレンチ遺構検出状態 | 2. Pトレンチ遺構完掘状態 |
| 図版30 | 1. ST-4検出状態 | 2. ST-4遺物出土状態 |

- 図版31 1. ST-4完掘状態 2. ST-4鉄鎌出土状態 (25図-1)
- 図版32 トレンチ出土遺物
- 図版33 トレンチ・第I, II調査区出土遺物
- 図版34 第I, II, III調査区出土遺物
- 図版35 1. トレンチ・第I, II調査区出土遺物 2. トレンチ・ST-2出土種子
- 図版36 ST-1出土遺物
- 図版37 ST-2出土遺物 (1)
- 図版38 ST-2出土遺物 (2)
- 図版39 ST-2出土遺物 (3)
- 図版40 ST-2出土遺物 (4)
- 図版41 ST-2出土遺物 (5)
- 図版42 ST-2出土遺物 (6)
- 図版43 ST-2出土遺物 (7)
- 図版44 ST-2出土遺物 (8)
- 図版45 ST-3出土遺物
- 図版46 ST-4出土遺物 (1)
- 図版47 ST-4出土遺物 (2)
- 図版48 1. ST-2出土鉄鎌 2. ST-2・ST-4・TR-P出土鉄鎌, 鉄器

表 目 次

第1表 ST-2ピット計測表

第2表 鉄器計測表

第3表 出土土器観察表

I 調査にいたる経過

高知県香美郡土佐山田町林田に所在する「林田遺跡」は、昭和52年9月ビニールハウス建造中に上村昭夫氏によって土器片が発見され、以来周知の遺跡とされてきた。

林田地区は、物部川の東岸に開ける河岸段丘であり、現状は人家と水田、畑であるが、耕地区分等は狭く近代農業經營に即応した耕区の区画形質の改善の声がたかまりつつあった。この住民の要請をもとに土佐山田町及び明治土地改良区は、県営明治地区圃場整備事業林田工区として本地区的整備を立案した。土佐山田町教育委員会は、その対象地が周知の遺跡として確認されている地点でもあり、その対策について事業主体である高知県土木部南国耕地事務所及び土地改良区と協議を続けた。昭和58年3月9日には、現地において土佐山田町及び土佐山田町教育委員会、南国耕地事務所、土地改良区、地権者等によって現地踏査及び工事計画の説明会が開かれた。高知県教育委員会文化振興課からも宅間一之が参加し、周知の遺跡に係る土木工事についてその保存と対策について地権者の了解と理解を要請した。

昭和58年3月25日、高知県知事は「明治地区県営圃場整備事業」として、耕地の集団化、用水路、道路の整備を含む具体的な計画とともに、文化財保護法57条の3に基いて発掘届を提出した。対象面積は95,852m²および、物部川東岸の舌状台地のほぼ全域にわたり、「林田遺跡」として把握されている地区はすべて包含されることとなった。

「林田遺跡」は、土器片の発見された地点を中心に、現状地形からその範囲を推定していたものであり、早急に正確な遺跡範囲の確認が必要となった。このため土佐山田町教育委員会では現地踏査によって遺物の表面採取調査に着手するとともに、昭和58年4月25、26、27日の3日間にわたって試掘を含む範囲確認調査を実施することとし、宅間一之、山本哲也が調査を担当した。調査は1mグリッド36ヶ所を設定し、土層の確認と遺構、遺物存否の確認につとめ、工事区内の遺跡の現況を把握した。これに基き土佐山田町教育委員会は、南国耕地事務所、明治地区土地改良区、地権者との間にたって遺跡保存を前提にした協議を重ねた。この結果、遺跡保存を優先し可能な範囲の工事内容の変更が行なわれ遺跡破壊が最少限にいく止められる内容が示された。この内容をもって土佐山田町教育委員会は、昭和58年5月28日、文化財保護法98条の2に基いて発掘届を提出した。

調査の円滑な実施を目指して調査団も編成され、土佐山田町教育委員会が主体となり、高知県教育委員会、南国耕地事務所、明治地区土地改良区の協力も得て、昭和58年6月27日から開始した。

調査にあたっては、遺跡の保存に配慮し、土盛工事等の範囲についてはその性格を把握するにとどめ、用水路工事や、耕土はぎとり等によって破壊が予想される部分最少限範囲の記録保存の方法をとった。現地は、作物栽培は続行されつつ、ビニールハウスは存続しつつの工事であり、調査期間は分断せざるを得なかった。このため最終的に調査が終了したのは昭和58年9月16日であった。

II 位置と環境

1 位置

林田遺跡は高知県香美郡土佐山田町林田地区に所在している。土佐山田町は、高知県のほぼ中央部に位置しており、北部の山間部と物部川の沖積扇状地、長岡台地よりなり、香長平野の北部を占めている。物部川は県中央部における最大の河川であり、三嶺を水源として山間部を西流し、急峻な渓谷を形成するとともに中流域ではよく発達した河岸段丘がみられる。土佐山田町神母木より平野部に流れ出し、南国市と野市町をうるおし太平洋へそいでいる。

地質的には中央構造線以南の外帯の秩父帯に属している。遺跡の立地する一帯は杉田構造線と岩改構造線にはさまれる秩父帯の中の中帶であり、白亜紀の地層群がみられる。

遺跡の立地は地形的には、物部川が山間部より平野部に流れ出す扇状地の西岸の河岸段丘上である。この河岸段丘は物部川最下流の段丘であり、かなりの規模をもちゆるやかに丘陵部へと続いている。また、石灰岩の洞穴で、弥生時代の遺跡でも有名な龍河洞を源流とする小河川により南北に分断され、北部は宮の口、舟谷、南部は佐古藪、林田、山田島の各地区となっている。

段丘上は標高50m前後を測り、沖積面からの比高は約10mであり急峻な崖面をなす。遺跡の現状は、一部水田で、他はビニールハウスと畠地であり、ビニールハウスの設置等にともない遺物が発見される事があるが、大半は現状保存の形が取られ、破壊される場合は少ない。このような地形からして、物部川の増水、氾濫に対しても安全であり、現在でも利用されている丘陵端部の湧水を使えば、水田経営も十分なし得たと考えられる。また段丘上からは対岸の長岡台地、下流域の香長平野一円を望む事ができ、遺跡の立地条件としては最高の地である。

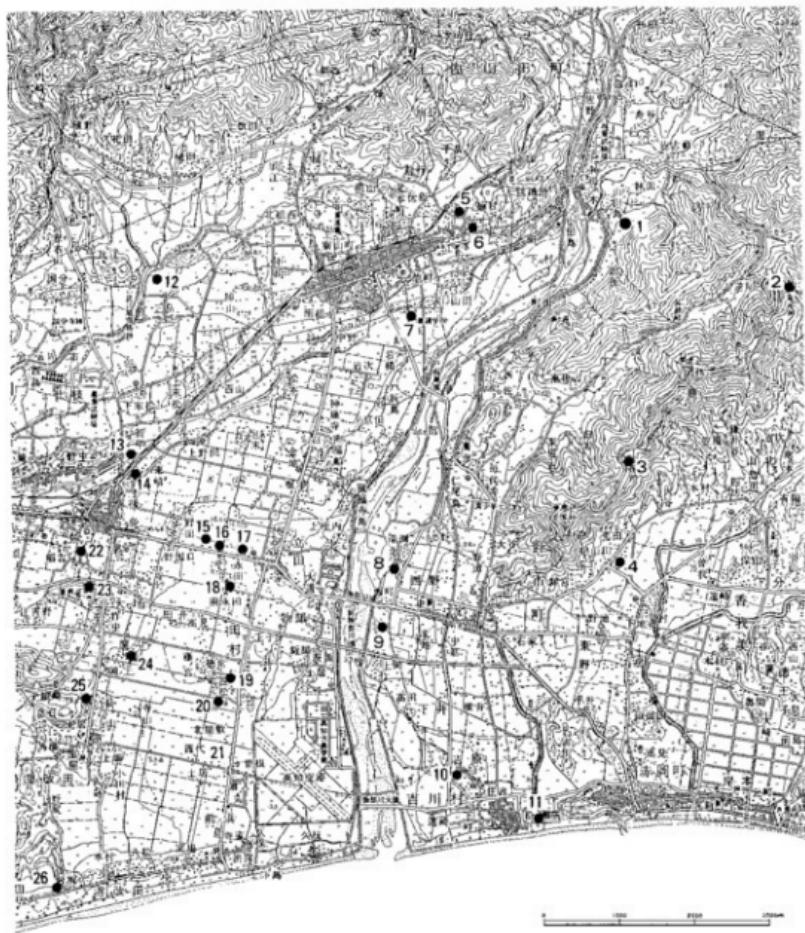
2 歴史的環境

土佐山田町は南に接する南国市とともに、物部川右岸の香長平野の大部分を占めるところから、県内では遺跡の分布密度も高く、大規模な遺跡も存在している。中でも長岡台地と物部川の河岸段丘上、また丘陵周辺部には多数の遺跡が所在しており、林田遺跡もその中の1つである。

物部川流域の遺跡を時代別にみれば弥生時代以降の遺跡が多く、縄文時代以前の遺跡は、その発見が少ない。これは、物部川の扇状地と沖積平野、また長岡台地などが稲作の諸条件に適していることを示しており、弥生時代以降の遺跡の急増という事になるのではないだろうか。

旧石器時代の遺跡は県内でも非常に少なく、土佐山田町内では現在のところ発見されていない。しかしながら、物部川流域の河岸段丘は立地条件としては最適であり、今後の踏査が期待される。

縄文時代の遺跡で町内に所在するのは飼古屋岩陰遺跡のみである。この遺跡は吉野川の支流



1 林田遺跡	10 野口遺跡	19 正善銅鐸出土地
2 龍河洞遺跡	11 住吉遺跡	20 西見当遺跡
3 笹ヶ峰遺跡	12 三島遺跡	21 田村遺跡
4 東曾我遺跡	13 五軒屋敷遺跡	22 大綿遺跡
5 鏡野中学校校庭遺跡	14 高知農業高校校庭遺跡	23 吾岡山遺跡
6 ヒビノキ遺跡	15 表中内遺跡	24 関銅鐸出土地
7 原遺跡	16 平杭遺跡	25 秋葉山遺跡
8 深潤遺跡	17 大北遺跡	26 トリアサリ遺跡
9 北地遺跡	18 上細工瀬遺跡	

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

である穴内川流域の段丘上に立地しており、二次堆積層ながら早期の押型文土器を出土している。物部川流域では土佐山田町の上流、香北町に良布遺跡が所在している。その立地は標高120mの河岸段丘上であり、縄文時代晚期の遺物と、地点を違え弥生時代後期の遺物が出土している。土佐山田町内の物部川流域では他に縄文時代の遺跡は発見されていないが、旧石器と同様に今後の踏査により発見される可能性は高いと考えられる。

弥生時代の遺跡は急増するが、現在のところ前期の遺跡は発見されていない。しかしながら、物部川下流域の南国市田村遺跡群では、前期前半の集落から後期前半にわたる遺構が発見されており、周辺部にも前期後半の遺跡が発見されているので、土佐山田町内においても前期にさかのぼる遺跡の発見が期待される。

中期の遺跡としては、龍河洞遺跡が広く知られている。当遺跡は三宝山（322m）の中腹に開口する石灰岩洞穴であり、中期後半の遺物とともに獸骨、貝類などが出土している。また同時期と考えられる遺跡としては、笠ヶ峰、雪ヶ峰、子岳遺跡などが知られているが、出土遺物は少なく、石庵丁、石斧、少量の土器片が出土しているだけである。これらの遺跡は、龍河洞遺跡と同様に比高100m以上の高所に立地しており、高地性集落遺跡であるといえよう。また、発掘調査の行なわれた遺跡として原遺跡がある。当遺跡は長岡台地の南、沖積平野の扇状地上に立地しており、從来、遺跡の存在はあまり知られていない地域であった。調査の結果によれば、中期後半の住居址1棟、集落を囲む環濠と考えられる溝が発見されており、町内における中期の集落を知る上で注目すべき遺跡である。

町内の後期の遺跡としては、鏡野中学校校庭遺跡、ヒビノキ遺跡の2遺跡が知られている。ヒビノキ、原、両遺跡は発掘調査が行なわれており、鏡野中学校校庭遺跡も最近、運動場の排水工事が行なわれ、一部ではあるが調査が行なわれている。その結果、後期後半の遺物を中心となって出土している。ヒビノキ遺跡は後期中葉から古墳時代にかけての遺跡であり、土佐山田町の町内に存在し地形的には長岡台地に立地する。遺跡の広がりとしては、北の鏡野中学校校庭遺跡と続く一連の遺跡とも考えられ、かなり大規模な遺跡の可能性がある。発掘調査によれば、後期の住居址9棟、土塹墓4基と、古墳時代前期の住居址2棟が発見されている。住居址にはベッド状遺構をもつものが4棟あり注目されている。出土遺物はヒビノキI・II・III式に分類され、I・II式は弥生時代後期中葉～後半、III式は古墳時代前期と基本的編年がなされている。

町内における青銅器の出土例は非常に少ない。現存するものではなく、楠目出土とされる銅鐸が知られるのみである。

古墳時代の遺跡としては山麓部に多数の古墳が存在しており、何れも後期古墳である。ただ1例、大塚古墳が前方後円墳とされているが、すでに国道により前方部にあたる部分は破壊されている。この時代の集落址は、発見されていないが、古墳の存在を考えれば当然存在すべきであり、今後の課題である。

古墳時代以降の遺跡としては、須恵器と瓦の窯址が山麓部に発見されている。物部川の東岸にも、林田地区の南、加茂地区からも瓦が発見されており、窯址の存在が知られる。

中世では加茂地区的烏ヶ森に城址が残されている。烏ヶ森城は標高191mを測り、急峻な斜面をもっている。山頂には土壘、詰の段などが残されており、きわめて堅固な城である。城主は、土佐七守護の1人である山田氏の重臣、西内常陸とされている。また、地元の人々の話によれば、林田地区には古くより、寺院、屋敷が存在していたとのことであり、地形からみても、何らかの屋敷跡があつたことを知ることができる。

参考文献

1. 「土佐山田町史」 土佐山田町教育委員会 1979
2. 「南国市史」上巻 南国市 1979
3. 岡本健児・広田典夫「ひびのき遺跡」 土佐山田町教育委員会 1977
4. 山本哲也他「公共施設設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—原遺跡一」 高知県教育委員会 1983
5. 広田典夫「公共施設設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—原遺跡II—」『高知県文化財調査報告書』(第25集) 高知県教育委員会 1984
6. 森田尚宏他「阿古屋岩除遺跡発掘調査報告書」 日本道路公団・高知県教育委員会 1983
7. 出原恵三他「西見当遺跡発掘調査報告書」 高知県教育委員会 1983
8. 岡本健児『高知県の考古学』 吉川弘文館 1966

III 調査経過

1. 試掘調査

土佐山田町林田カリヤ207番地を中心とする耕作地より、弥生時代～古墳時代の遺物(主として土器)が出土することから、調査地は昭和52年の発見以来、「林田遺跡」として知られていた。

調査の起因となった土木工事計画(県営圃場整備事業)は、面積約9haにおよぶ広範囲な事業であり、これまで把握されていた遺物出土地点及び遺物散布範囲からでは、発掘調査地の選定及び当該工事工法の変更実施について検討する資料が不足していた。このため、表面採集による遺物散布状態から求められるデーターを補足する意味もあり、事業計画地において試掘調査を実施し、遺物包含層・遺構・土層堆積状況についての確認調査を行うことになった。

試掘調査は、現地調査をふまえて昭和58年4月25日・26日・27日の3日間に実施した。調査は、磁北に準じた基準線をもつグリッドを設けることとし、1m×1m(1m²)のテストグリッドを地形に応じて任意の個所に計36ヶ所設定した。グリッドには、耕作物の関係で調査ができなかったものがあったが(No.22・30グリッド)、34ヶ所・計34m²で発掘を行った。(第2図)なお、グリッドは、設定地の地形によりNo.1～3グリッド(A)・No.4～10グリッド(B)・No.11～13グリッド(C)・No.14～24グリッド(D)・No.25グリッド(E)・No.26～29グリッド(F)・No.30～32グリッド(G)・No.33～36グリッド(H)の計8地点に大別することが可能であり、グリッドの調査内容をまとめて、8地点における概略を把握することとした。

各地点(A～H)の調査結果は、次のとおりである。

A地点……表土下約30cmで、砂礫層がみられ、遺構及び遺物包含層は認められない。

B地点……No.4グリッドで第II層黄茶褐色粘質層から須恵器片が出土し、No.5グリッド第III層暗褐色粘質層(音地土)から弥生土器片が、またNo.6グリッド第III層茶色砂礫層上にピット(埋土は第II層暗褐色粘質層)が認められた。

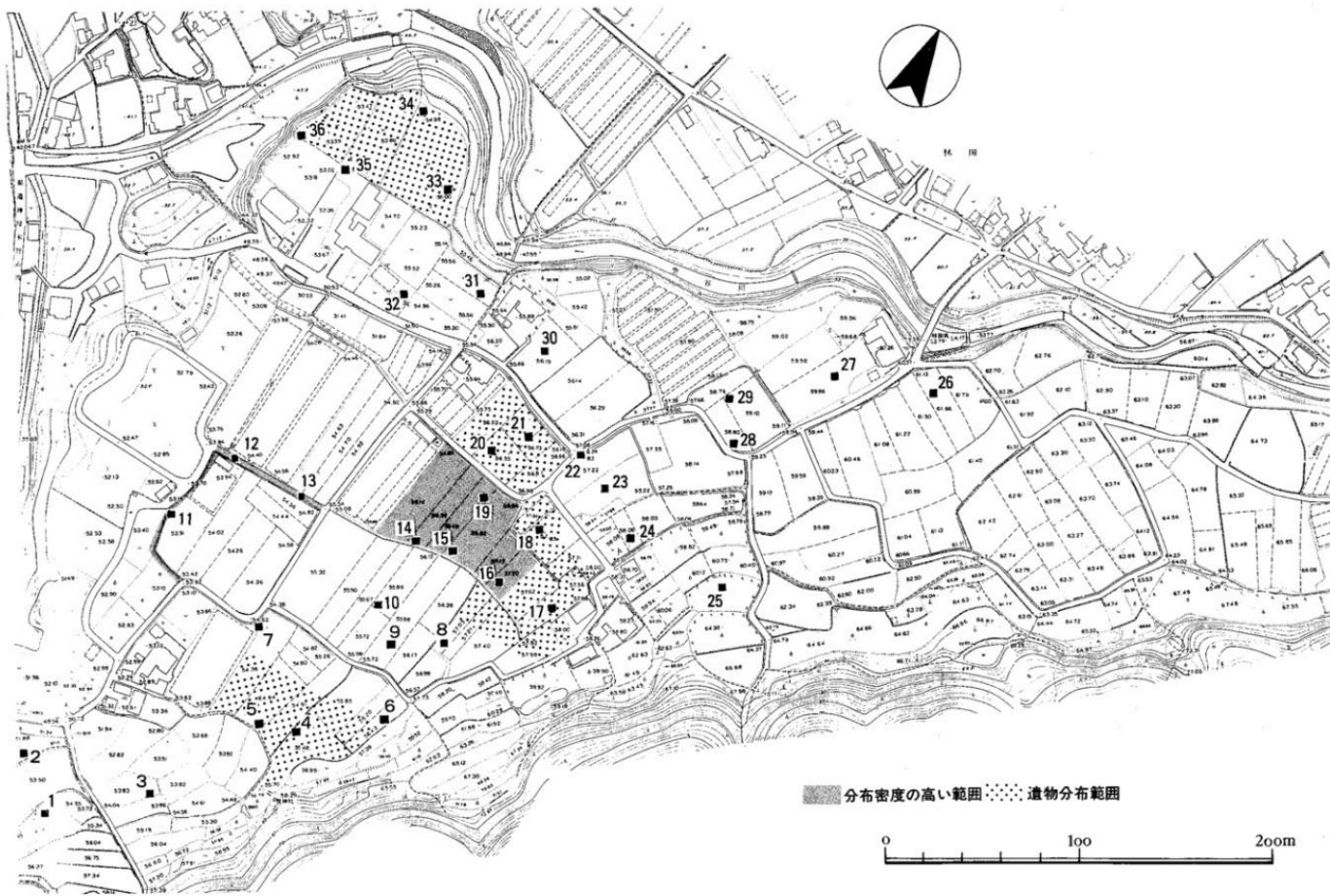
C地点……No.12グリッドでは、耕作土下に弥生土器を含む暗褐色粘質層(音地土)が堆積しており、遺物包含層が確認された。また、No.11グリッドでは、第II層暗茶褐色粘質層が約150cmの厚みで堆積しており、中世(室町時代)に属する土器片が出土した。

D地点……弥生土器片を含む暗褐色粘質層が、No.14・16・18～22グリッドで認められ、遺構の存在が推測された。暗褐色粘質層は、約25cm前後の厚みで平均的に堆積していた。

E地点……表土下で粘礫層となっていて、遺物は採集されなかった。

F地点……表土下50～70cmで地山層である砂礫層がみられ、遺構及び遺物包含層はみられない。

G地点……表土下15～20cmで地山層(砂礫層)であり、遺物の散布はみられない。



第2図 試掘グリッド設定図

H地点……暗褐色粘質層が堆積しており、細片の弥生土器片が出土した。遺構及び遺物包含層はみられなかった。

調査の結果、B・C・D地点において遺物包含層及び遺構の所在が確認され、特にC及びD地点で、遺物を含む暗褐色粘質層が比較的厚く堆積していることが判明した。

調査結果をもとに、B～D地点周辺では盛土工法の採用による工事計画の変更を行い、極力掘削工事を避ける方向で協議を進めることとなり、水路設置及び一部掘削工事を行なうことが回避できない地点についてのみ、緊急発掘調査を実施することになった。

試掘調査に統く本調査では、C及びD地点から弥生時代に属する住居遺構が検出され、試掘調査で得た調査内容が、遺構形成状況を反映するものであったことが判明した。

調査対象地の面積に比べると、試掘調査範囲は微少なものであったが、調査地の概要を把握することが充分可能なものであった。本調査においては、試掘調査の結果に基づいて、調査地を選定することになった。

2. トレンチ調査

試掘調査により、林田地区全体の遺構、遺物の大勢をつかむことができたので、整備事業計画との調整を行なった。その結果、切土工法によって遺跡が破壊されると考えられる範囲は狭くなったものの、依然として遺跡の中心地および、遺構面の深さなどを知る資料に乏しく、調査対象面積は5000m²以上となり、工期等を考慮すれば現状では調査不可能と考えざるを得なかった。そこで、本調査に入る前に、再度トレンチによる試掘調査を行ない検討することになった。

トレンチによる試掘調査は本調査を考え、調査対象地にグリッドを設定、これによることにした。グリッドは磁北を基準とし、20mの大グリッド、さらに4mの小グリッドを設置した。大グリッドは、南から数字により1～12、東西はアルファベットによりA～Hとし、小グリッドは、左上から平行式に1～25までとし、北東の杭により呼ぶことにした。

試掘トレンチは畑地の現状、整備事業の水路の位置などを考慮し、グリッドに合致するよう幅4mで、A～Qの18本を設定した。調査は1983年6月27日より開始。A～Mトレンチは7月14日に一応終了し、調査対象地内の遺跡の広がり、密度、遺構面の深さなどを知ることができた。また、N～Qの各トレンチは整備計画上水路部分にあたり、掘削深度も深いので、当初より調査範囲に入っていたが、ビニールハウス、作物などの関係により、本調査終了後、9月5日より16日まで調査を行ない、全ての発掘調査を終了した。

次に各トレンチについての概要を述べる。

1) Aトレンチ

Aトレンチは東西方向9グリッド(36m)のトレンチである。層序はI層耕作土(26cm) II層茶褐色土(30cm) III層黒色土(12cm) IV層黒褐色土(18cm) V層暗褐色土(10cm)である。

III・IV層中には火山ガラスがみられ、音地と呼ばれる火山灰層の混入した腐蝕土であり、IV層黒褐色土もその漸移層である。またIII層の最も深い部分には約5cmほどの厚さで赤ホヤ火山灰(音地と呼ぶ)とみられるシルト質の黄色土がみられた。遺物包含層はIII~IV層であるが、弥生、中世の遺物が混在しており、攪乱している。

遺構検出面はV層暗褐色土であり、中心部に十数個のピットが散在している。ピットはいずれも、直径20~30cm、深さ10~20cmを測り、埋土は黒褐色土である。

出土遺物は、III~IV層中から、弥生後期後半の叩目をもつ土器、須恵器、土師質土器の細片などが少量出土しており、図示できたものとしては、須恵器の大甕底部(第10図34)があり、外面に左上りの叩目がみられる。

遺構出土遺物も少なく、少量の土師質土器片に弥生土器片が混っている。しかし、P1およびP2から出土した土師質の土釜は同一個体であり、接合し約 $\frac{1}{2}$ 個体となった。中世末から近世にかけての良好な資料である。(第8図32)出土遺物からみれば弥生時代の遺構ではなく、すべて中世末~近世のピットと考えられる。

2) Bトレント

Bトレントは、Aトレントに直交する、南北方向5グリッド(20m)のトレントである。基本的な層序は、Aトレントと同じであるが、III・IV層は全面にはみられず、中心部に間層として一部入っている。このように、A・Bトレントの層序によれば、中心部がやや低く、両側に高い微地形であったと考えられる。

遺構検出面もAトレントと同じく、V層暗褐色土であるが、レベル的にはやや高い。検出された遺構は、直径10cm前後、深さ10~15cmを測る小さめのピットであり、C11—10を中心として円形に並んでいる。

出土遺物は少なく、Aトレント同様に、弥生土器、須恵器、土師質土器などの細片である。遺構出土の遺物も、少量の土師質土器に弥生土器の細片が混在しているのみである。

以上のようにA・Bトレントにおいては弥生時代の遺構は発見されず、検出されたピット群は出土遺物により、中世~近世と考えられる。

3) C・Dトレント

Cトレントは当初、Bトレントの延長としてEトレントに統くトレントであったが、作物の関係で、C・Dの2本のトレントとした。いずれも、南北方向5グリッド(12m)のトレントである。基本層序はC・Dトレントとも同じであり、I層耕作土(10~15cm)II層黒色土(15~20cm)III層黄褐色土(地山)である。II層黒色土中下部に弥生土器を含んでおり包含層である。

遺構検出面はIII層上面であり、Cトレントでは数個のピットと住居址の一部を検出した。D



第3図 トレンチ・調査区設定図

トレンチにも住居址の一部がかかっていたが、この段階では検出できなかった。住居址はCトレンチの西壁にかけ、D10—7、12グリッドに検出され、埋土はII層と同じ黒色土であった。住居址部分からは小型の鉢、叩きのある甕片などが一括出土し、時期的には弥生時代後期末と推定された。なお出土遺物は本調査を待ち、現状で残すこととした。

C・Dトレンチのピットからは、住居址と同様に後期末の土器片が出土しており同時期と考えられたが、建物址としてとらえられるものではなかった。

II層包含層出土の遺物はあまり多くなく、ほとんどが叩きをもつものであった。中に小型の甕(第10図24)がみられ、外面は左上りの叩きをナデ消し、底部にハケ目、内面は指頭圧痕がみられる。

4) Eトレンチ

B・Cトレンチに続く、南北方向3グリッド(12m)のトレンチである。基本層序はC・Dトレンチと同様、I層耕作土(15cm) II層黒色土(15cm)、III層黄褐色土(地山)である。遺構は検出されず、II層中より弥生土器片を出土したのみである。

5) Fトレンチ

C・D・Eトレンチより西へ延びる、東西方向13グリッド(52m)のトレンチである。基本層序はC・Dトレンチと同じく、I層耕作土(10~15cm)、II層黒色土(10~20cm)、III層黄褐色土(地山)であり、II層黒色土は西より東に向って薄くなっている。

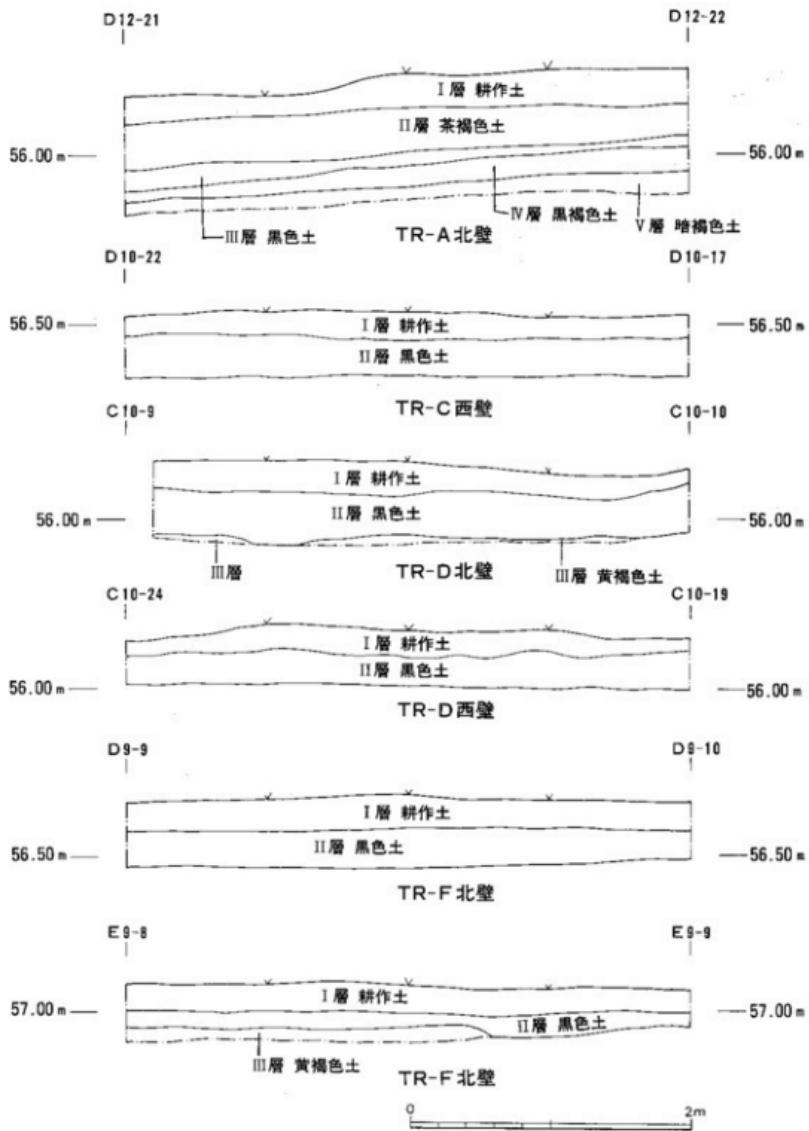
検出された遺構はピットのみで、直径20~30cm、深さ10~20cmを測るもののが大部分であり、埋土は黒色土である。出土遺物はやはり弥生土器、須恵器などであり、弥生時代後期末と古代の2時期のものが混在している。

6) Gトレンチ

Fトレンチに直交する、南北方向10グリッド(40m)のトレンチである。基本層序はC~Fトレンチと同様、I層耕作土(10~15cm) II層黒色土(20cm)であり、南へとII層が厚くなっている。

検出遺構はピットと土壤であるが、検出面がII層黒色土下面であり、埋土も黒色土もしくは黒褐色土なので検出は難しかった。ピットはやはり直径20~30cm、深さ10~20cmを測り、円形が大部分であるが、方形を呈するものも存在していた。土壤は東壁にかかり検出され、直径約1.5mを測る円形である。ピットと土壤はF9—16・21、F8—1・2に集中して検出されており、その南北の範囲にはみられない。

遺物としては、II層黒色土中より、弥生土器、須恵器、土師器、土師質土器などが少量ながら出土しており、遺構からも同様に弥生土器、須恵器、土師質土器を出土しているので、弥生



第4図 A～F トレンチセクション図

時代後期末から古代、中世の時期が考えられる。

7) Hトレンチ

Gトレンチより西に延びる、東西方向4グリッド(16m)のトレンチである。基本層序はGトレンチと同じく、I層耕作土(15cm) II層黒色土(20cm) III層黄褐色土(地山)であり、II層はGトレンチ南部と同様に厚くなっている。

検出遺構は、直径20~30cm、深さ20cm前後のピット数個だけであり、検出面は地山の茶褐色土、埋土は黒色土および、黒褐色土である。

遺物はII層黒色土とピットから、弥生土器と土師質土器が少量出土している。図示できたものはII層出土の土師質小皿(第10図1)とP12出土の土師質杯(第10図21)であり、杯は大きく外反し開き、外面にロクロ目がみられる。

8) Iトレンチ

Hトレンチの西端より南へ延長した南北方向のトレンチであり、6グリッド(24m)である。基本層序は他のトレンチ同様に、I層耕作土(10~15cm) II層黒色土(25cm)であり、II層中にIII層黒褐色土が漸移的に一部みられる。地山は茶褐色土である。

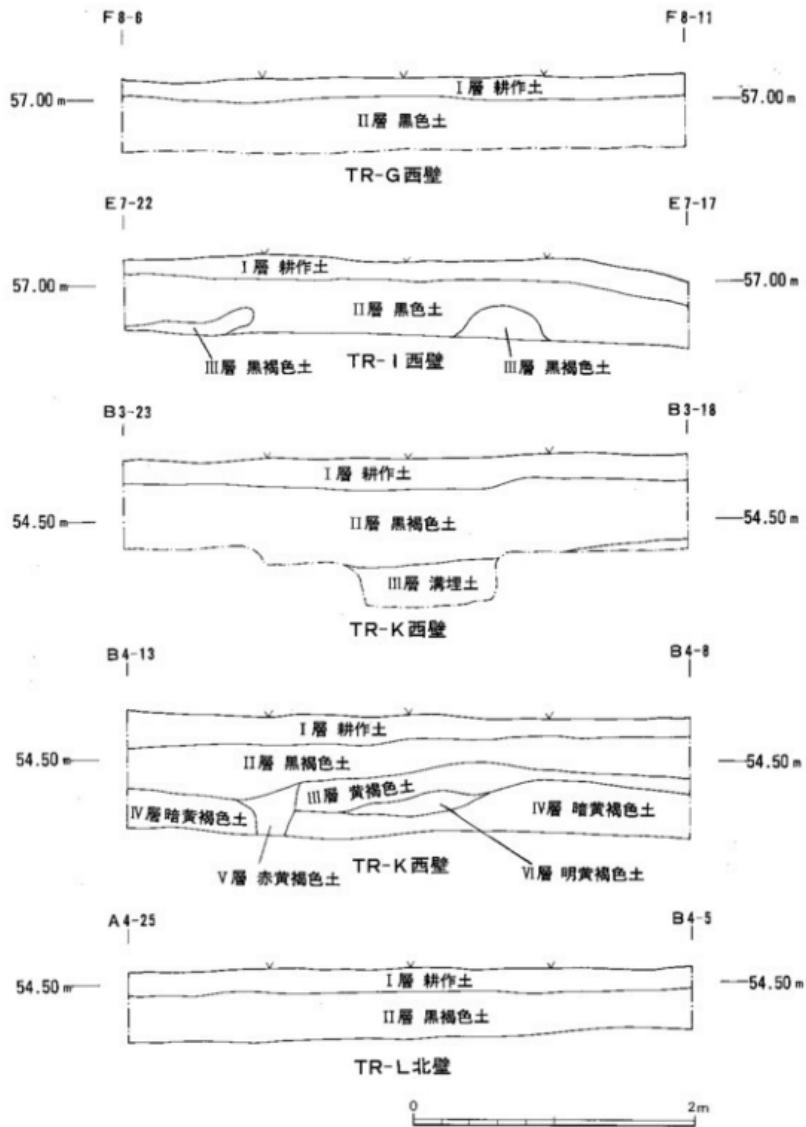
Iトレンチでは地山まで下がったが遺構は検出されず、遺物もII層中から若干、弥生土器片を出土するのみであり、遺跡の中心からやや離れていると考えられる。

9) Jトレンチ

このトレンチは、試掘調査により遺物の分布が認められた南の範囲の中で、Iトレンチの南48mに位置しており、地形の関係により東西方向2グリッド(8m)である。層序はA~Iトレンチとはやや違いがみられ、I層耕作土(10cm) II層茶褐色土(30cm) III層暗褐色土(20cm) IV層黄褐色土(5~10cm) V層暗茶褐色土(地山)である。III・IV層中には火山ガラスがみられるのでIV層のシルト質黄褐色土は赤ホヤ火山灰の2次堆積、III層の暗褐色土はIV層の腐蝕土化したものと考えられ、IV層は東半分、D4-23にみられる。

遺構はV層暗茶褐色土上面を検出面として、西半分、D4-22にピットが集中して発見されている。ピットは、直径30~40cm、深さ20~30cmを測り、埋土はIV層がブロック状に混る暗褐色土である。

遺物はIII層中より土師質土器、瓦質土器が出土しており、IV層中にはみられない。ピット出土遺物もやはり土師質と瓦質土器であり、弥生土器は出土していないので、時期的には中世の遺構の広がりが考えられる。



第5図 G～Lトレンチセクション図

10) Kトレント

Jトレントより西へ32mに位置する南北方向13グリッド(52m)のトレントであり、Jトレントを設定した畠地に対し約1mの比高をもち、低くなっている。基本層序はJトレントとは異り、I層耕作土(10~15cm) II層黒褐色土(15~20cm) III層黄褐色土(5~15cm) IV層暗黄褐色土(30cm) VII層灰褐色土(地山)である。III~VII層中には間層として、V層赤黄褐色土(30cm) VI層明黄褐色土(10cm)がみられるが、V層は木根による擾乱であり、VI層はIII層とIV層の漸移層である。また、トレントの北に比べ、南ではII層が30cmと厚くなっている、南へ低くなる微地形である。

遺構はB3-3より南において、VII層(地山)上面に、溝と数十個のピットを検出している。溝は東西方向であり、幅60cm、埋土は黒灰褐色である。ピットは直径20~30cm、深さ20cmを測り、埋土は溝と同じく黒灰褐色である。

Kトレントでは、B3-18より南で中世の遺物がかなり出土した。出土層位はII層黒褐色土の下面からVII層灰褐色土にかけてであり、遺構出土遺物は少ない。出土遺物は土師質土器を中心であり大半は細片であるが、回転糸切りの小皿(第10図2~4)、土師質および瓦質の皿(第10図5~8)、土師質杯(第10図10、11)同じく底部回転糸切りの杯(第10図17、20)、須恵質の杯(第10図15、16)、瓦質の鉢(第10図33)、青磁(第10図22、23)、白磁(第10図12~14)土鏡(第10図25、26)などが出土している。また時期的には古い、灰釉瓶(第10図21)、須恵器甕(第10図31)なども少量混在している。

遺構出土遺物としては、溝から少量の土師質土器が出土している他は、ピット(P1)より須恵質、底部回転糸切りの杯が出土している。

土器以外にも、桃核が數十個出土しており、栽培されていたものと考えられる。桃核以外にはアラギリの種子が1点出土しており、野生種と思われる。(図版35—2、5、6)

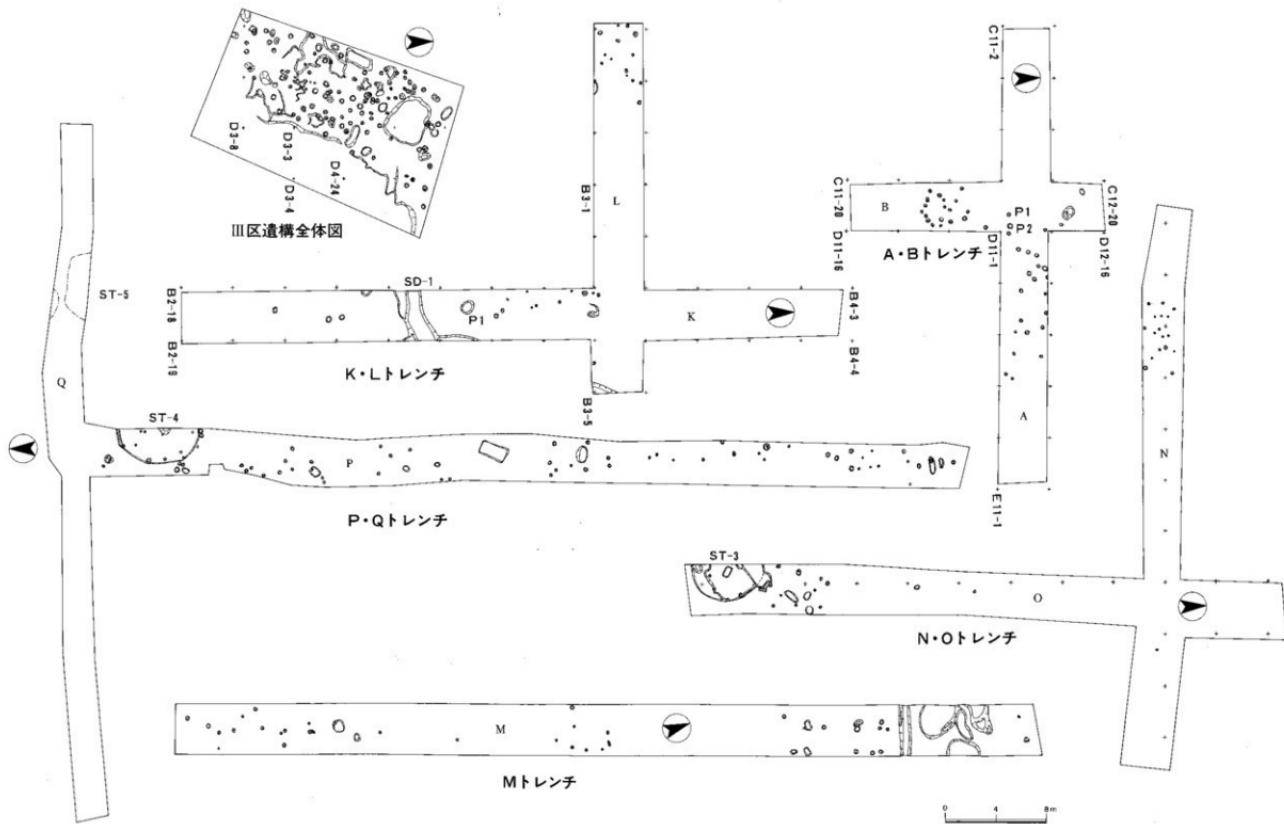
時期的には、包含層の遺物は平安時代後期から室町時代にいたっており、地形的にみても2次堆積と思われ、周辺部に各時代の遺構が存在するものと考えられる。検出遺構は、須恵質の杯などからみれば、鎌倉から室町時代(13~14C)にかけての時期が考えられる。

11) Lトレント

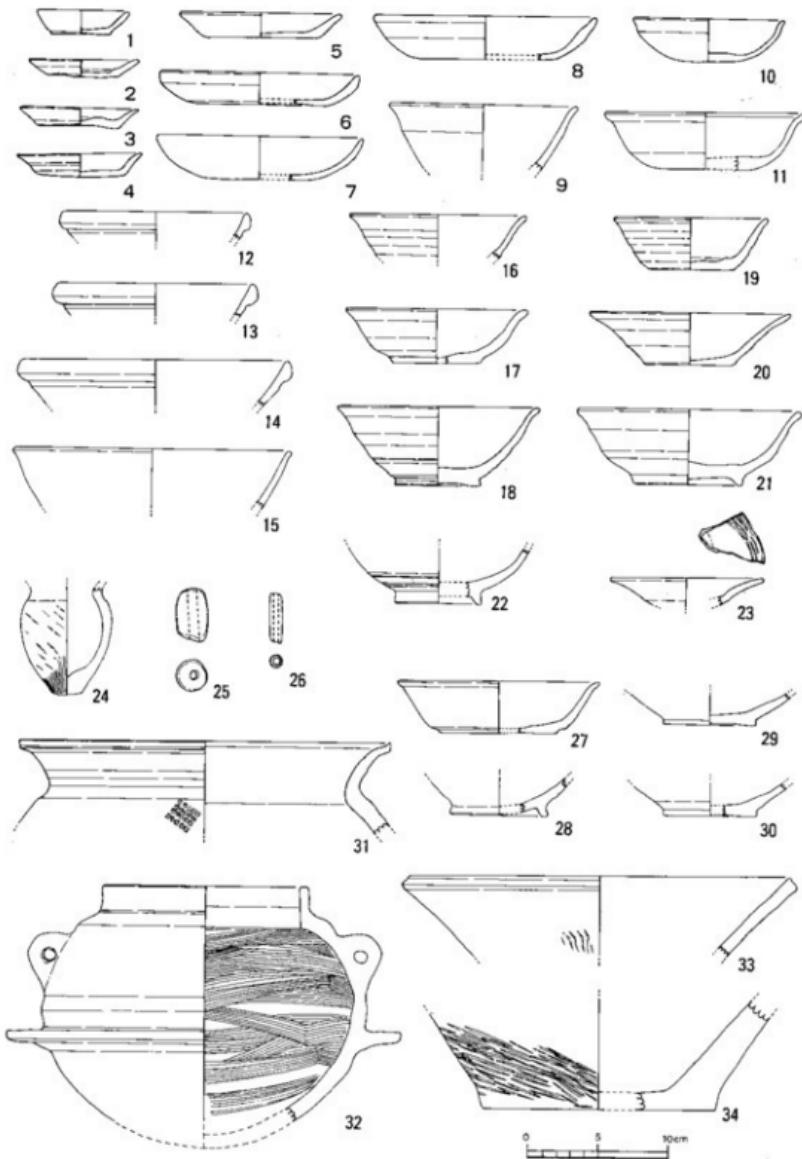
Kトレントに直交する東西方向7グリッド(28m)のトレントである。基本層序は、Kトレントの南部と同じく、I層耕作土(10~15cm)、II層黒褐色土(20cm)、III層暗褐色土(地山)であり、地形的にはやはり、西へ低くなっている。

遺構は西端部A4-23に十数個のピットが検出されている。ピットは直径10~15cm、深さも15cm前後を測り、III層上面に検出されている。埋土は黒褐色土である。

出土遺物は少なく、底部回転糸切りの土師質土器皿、杯(第8回5、19)などの他は細片である。



第6図 トレンチ・第三調査区平面図



第7図 トレンチ出土遺物

15) Mトレンチ

Mトレンチは水路部分であり、工事計画に添って設置したもので、グリッドの方向にはのらず、やや北東に振っている。トレンチは幅4m、全長65mであり、基本層序はI層耕作土(10~15cm)、II層黒褐色土(20cm)、III層茶褐色土(地山)である。

検出遺構はピット、土壤、溝である。ピットは直径10~20cm、深さ15~20cmを測り、散在しIII層上面より検出されている。土壤および溝は北部で検出されており、出土遺物より近代のものである。

出土遺物は少なく、II層中とピットより弥生土器の細片が出土しているのみである。

13) Nトレンチ

N~QトレンチもMトレンチ同様、水路部分にあたるため、グリッドラインには添っていないが、4m幅で設定した。当トレンチは全長44mであり、基本層序は、I層耕作土(16cm) II層暗茶褐色粘質土(12cm)、III層黒色土(13cm)、IV層褐色粘質土 V層茶褐色砂礫土である。IV層褐色粘質土は、トレンチの東から西にかけてゆるやかに傾斜しつつ堆積しており、上面でIII層黒色土を埋土とするピットが検出された。ピットは合計18個確認され、トレンチ西側中央部に集中している。直径15~30cm、深さ11~30cmの範囲におさまるが、遺構の前後関係、および遺構の性格については明確にできなかった。

出土遺物は、III層黒色土から土師質土器片とともに、弥生土器としては壺、甕、高杯、鉢(第9図1~4)などがあり、ピットからは少量の弥生土器片が出土している。

14) Oトレンチ

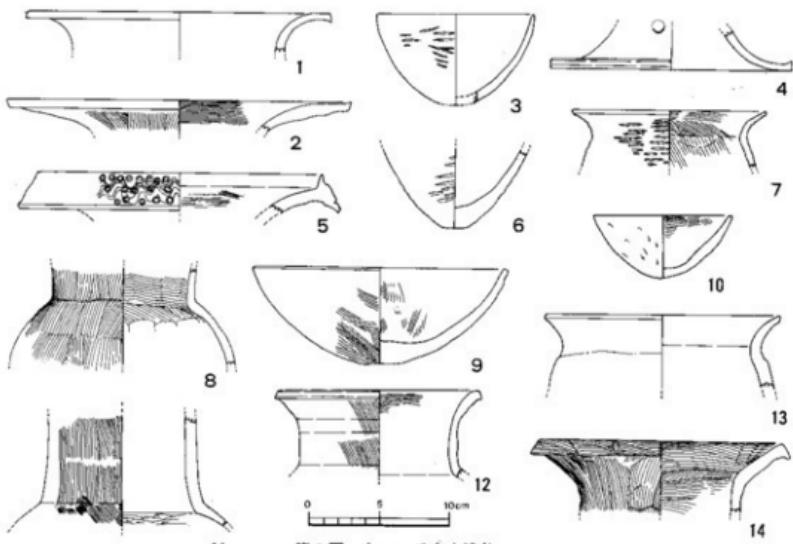
Nトレンチに直交する南北方向、全長48mのトレンチである。層序はI層耕作土、II層暗茶褐色粘砂土、III層黒色土、IV層淡茶褐色砂礫土(地山)である。

遺構はトレンチ南側において確認され、ピット12個、土壤5基、竪穴住居址1棟が検出された。遺構の埋土はいずれもIII層黒色土である。遺構出土遺物より検出された遺構は弥生時代と鎌倉~室町時代に所属時期が大別される。弥生時代の遺構としては、竪穴住居址1棟、住居址北側に隣接した土壤2基、および住居址北東部の土壤1基がみられ、その他の遺構(ピット)については、中世に所属するものと考えられる。

遺物はIII層黒色土より、櫛描波状文に竹管文をもつ壺口縁、甕、鉢(第9図5~10)が出土しており、住居址、土壤からも同時期の弥生土器が出土している。

15) Pトレンチ

Pトレンチは調査対象地の西側地域にあたる水路部分のはば南北方向、全長60mのトレンチである。層序はI層耕作土、II層灰色粘質土、III層黒色土、IV層茶褐色砂礫土である。III層黒



第8図 トレンチ出土遺物

色土は、トレンチ北部で平均約30cmと比較的厚く堆積しており、弥生土器の出土量は、設定したトレンチの中で最も多量であった。

遺構はトレンチの全域にわたり散在しており、トレンチの北端からは竪穴住居址1棟が検出された。その他の遺構としては、土壙2基、ピット55個である。ピットは直径20~30cm、深さ20cmを測るもののが大半であった。遺構の時期としては、竪穴住居址は弥生時代後期末、他の遺構については、その検出状態から、性格、所属時期について明確に区分することはできなかった。

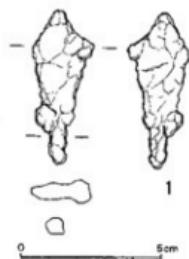
Ⅲ層出土遺物としては壺、甕、鉢などが存在するが、大半が細片であり、図示したものは壺、甕の口縁部（第9図11~14）のみ

である。その他の遺物としては、Ⅲ層下面より鐵鏃（第9図）が出土している。

また、Pトレンチの東側において、盛土工事のために整地作業（耕作土除去）がなされたので、立会調査を行った。その結果、黒色土を埋土とする直径18~30cm前後のピットが計18個、土壙状遺構3基の存在が認められ、Pトレンチの東側においても遺構の広がりが確認された。

16) Qトレンチ

Pトレンチに直交する東西方向、全長62mを測る水路部分のトレンチである。層序はPトレ



第9図 TR-P出土鐵鏃

ンチと同様であり、III層黒色土中から弥生土器が出土している。

遺構はトレンチの東壁にかかり竪穴住居址一棟、および土壤状遺構が検出された。検出面はIV層茶褐色砂礫土であり、埋土は黒色土であった。

Qトレンチでは、遺構の存在が確認されたため、該当工事の計画変更がなされ、保存されることとなった。このため検出遺構については、その位置および検出状態を記録し、遺構検出面上の精査を行うにとどめた。

以上のようにA～Q各トレンチの調査により、弥生時代後期末を中心として、古代、中世の各時代の遺物、遺構が発見された。弥生時代の遺構の中では竪穴住居址が、C・DトレンチにおいてST-2、OトレンチにST-3、PトレンチにST-4、QトレンチにST-5の計^(註2)4棟が検出され、注目されている。またピット、土壌はC・D～H、M～Oトレンチに検出されており、遺物の出土状況からも、調査対象地の南部を除き、ほぼ全面に遺構の広がりが認められ、集落址の存在が確認された。

古代の遺物は、A～Qまでの各トレンチで多少の差はあるが出土している。遺構はピットのみであり、F・Gトレンチを中心に検出されているので、この地域に集中していると考えられた。

中世は、J～Lトレンチから多量の遺物が出土しており、検出遺構は中世のピットだけなので、南部一帯が中世の遺跡の中心部であり、他の部分にも広がっていると推定された。

この調査結果を基にして、再度、整備計画の検討を行い、工法変更可能な部分については、盛土工法とし、切土による工事面積を最少限に食止め、掘削によりやむなく破壊される部分について本調査を行い、記録保存することとなった。

註1. 粉川昭平教授の鑑定による。

註2. ST-1が、第1調査区より発見され、ST-2～ST-5となっている。

3 本調査

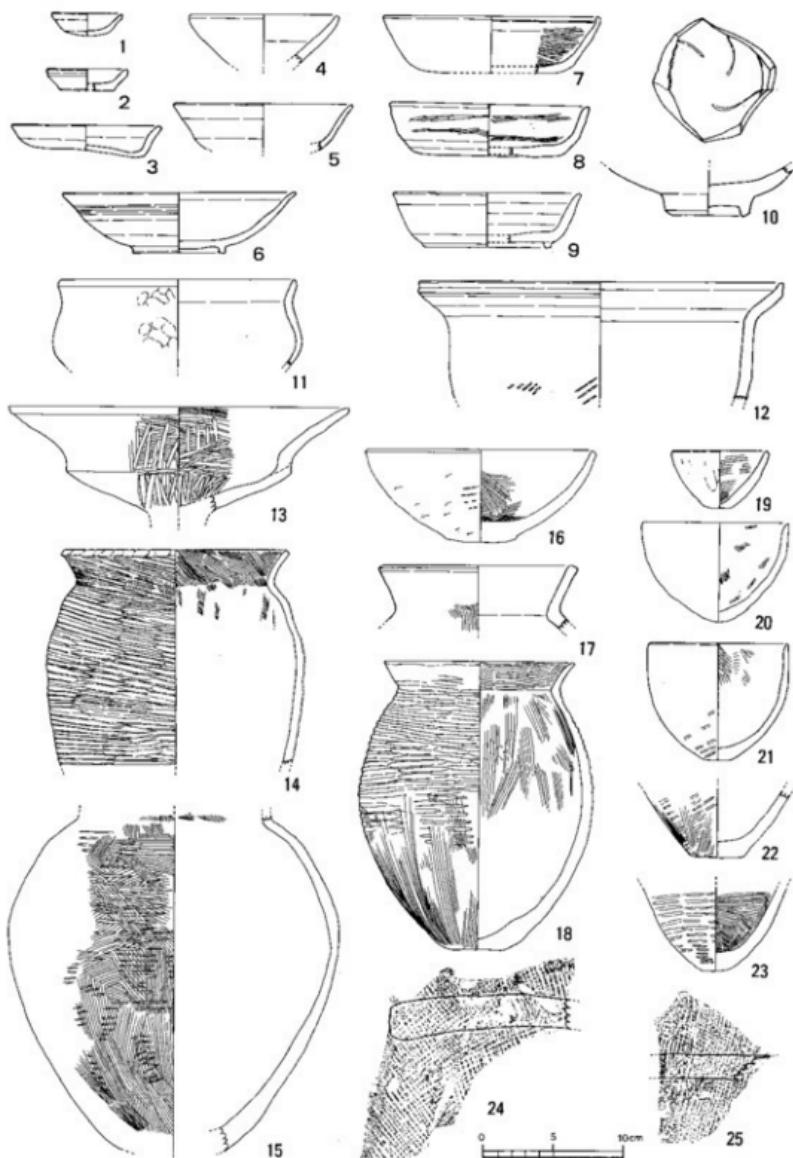
本調査はトレンチ調査の結果と工事計画の変更により、Gトレンチ周辺から北にかけての畠地を第1調査区、C・Dトレンチの住居址を第II調査区、Jトレンチの周辺を第III調査区として、7月14日から調査に着手した。第I調査区1,676m²、第II調査区431m²、第III調査区222m²を発堀し、8月20日に一応の終了をみた。なお、O～Qトレンチについては、この後9月に調査を行っている。

(1) 第I調査区

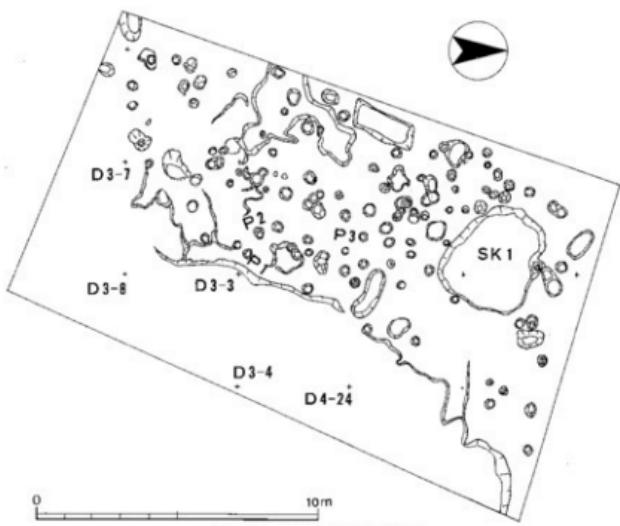
第I調査区では、工事計画に基づき調査範囲を決定した。層序はGトレンチで述べたように、II層黒色土が包含層であり、III層の褐色土（地山）を遺構検出面とする。地形的にはやや北が高く、南へと低くなっている。



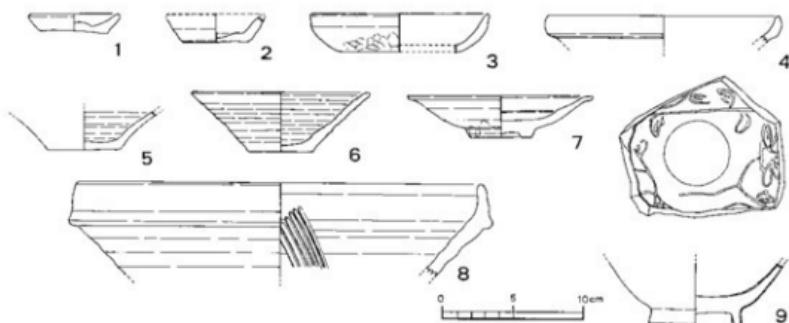
第10図 第I・II構造区平面図



第11図 第I・II調査区出土遺物



第12図 第III調査区平面図



第13図 第III調査区出土遺物

検出された遺構は、竪穴住居址1棟(ST-1)、ピット、土壙、溝である。ST-1は調査区の西壁にかかり寸ほどが検出されている。土壙は弥生時代と考えられるものが3基検出されており、他の土壙は近代および、出土遺物がなく時期不明である。ピットは調査区全域にわたり検出されたが、北部と南部に群をなしており2分される。時期的には北部のピット群が弥生時代、南部のピット群が古代～中世と考えられる。溝は調査区北壁より、南北方向に1本検出された。

II層黒色土中からは、かなりの量の弥生土器が出土したが、細片であり図示できなかった。時期的には、ほとんどのものが卯目をもつて後期末であろう。また、古代～中世の土器も混

在しており、内面にヘラ磨きをもつ土師器、須恵質杯口縁の他に、表面に叩目、裏面に布目を残す丸瓦などが出土している。（第11図5、8、25）

(2) 第II調査区

第II調査区はC・Dトレンチにおいて確認された堅穴住居址（ST-2）部分である。調査は第I調査区修了後、ST-2を完掘すべくC・Dトレンチ間を堀り下げた。その結果ST-2と、その周辺部に若干のピットを検出した。

当調査区のII層黒色土中からも弥生土器が出土しており、くの字状に開く壺口縁部、約半個体の甕、小型の鉢などが出土している。（第11図17・18・21）また第I調査区同様に古代～中世の遺物も出土しており、高台付の土師質の椀、表面に叩目、裏面に布目をもつ平瓦などが存在する。（第11図6、24）

(3) 第III調査区

第III調査区はJトレンチで検出された、中世のピット群を調査するために設定された。調査区の東半部には、赤ホヤ火山灰と考えられるシルト質の黄褐色土が厚く堆積しており、遺構は検出されなかった。西半部では土壤、ピットがかなりの密度で発見され、中世の遺物が出土している。ピット群は調査区外にも広がっているが、工法変更により全面的な掘削が避けられたので、今回の調査では拡張しなかった。

包含層よりの出土遺物としては、土師質土器が多く、底部回転糸切りによる小皿、同じく回転糸切りで内外面にロクロ目を残す杯、指頭圧痕を残す皿などをみることができる。（第13図1～3、6）

遺構出土遺物は、SK-1より玉縁状の口縁をもつ白磁、内外面にロクロ目を残し、回転糸切りの土師質の杯が、P1からは唐津系の皿、P2からは見込みに印花文を有する竜泉窯系の青磁、P3からは第4期の備前の擂鉢が出土している。（第13図4、5、7～9）

時期的には、備前擂鉢、土師質の杯、皿類は15C後半と考えられ、青磁と白磁もほぼ同時期であろうが、唐津系の皿の存在は、混入もしくはピットの重複と思われ、主なる時代としては室町時代後半と考えられる。

IV 遺構と遺物

1. 積穴住居址

積穴住居址は、第I・II調査区、O・P・Qの各トレンチで合計5棟検出されている。完掘されたのはST-2のみであり、ST-5は検出のみ、他の3棟は、いずれも調査区の壁にかかっており、完掘できなかった。以下、各住居址順に述べる。

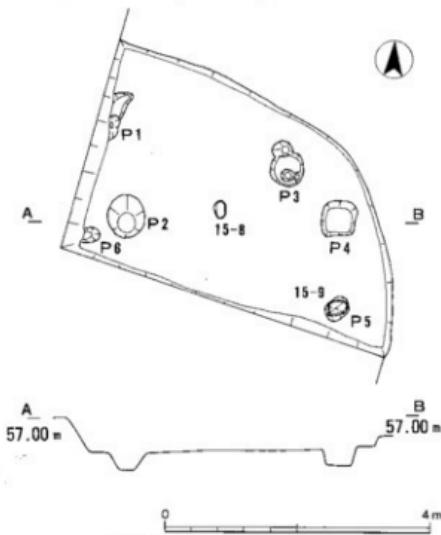
(1) ST-1

ST-1は第I調査区の北部、E10-18・19において、約 $\frac{1}{3}$ の北東部分が検出された。平面形は検出部分からみれば、円形ではないかと推定されるが、北壁が直線的なので隅丸方形、もしくは多角形をとる可能性も残されている。規模は円形とすれば、復元直径8m前後を測り、やや大型の住居址である。壁高は約16cmと低いが、床面は中央部へ向け、やや傾斜し深くなっている。ピットは床面より8個検出されているが、この中で柱穴と考えられるものは、P3・4・5である。P3は直径52cm、深さ23cmを測り、底部に柱根として直径20cm、深さ12cmの小ピットがみとめられる。また直径31cmのピットが切り合っているが、埋土が同じ黒色土のため前後関係は不明である。P4は1辺50cmを測るほぼ正方形で、深さは24cmである。P5はやや不整形をなす円形で、直径40cm、深さ28cmを測り、底部から焼けて赤褐色に変色した砂岩の大型砾石が出土している。P2は中央からややずれているが、中央ピットではないかと考えられ、

やや楕円形を呈し、長径64cm、短径56cm、深さ26cmを測り、小さめの底をもつ。

P1・6は不整形のピットであり性格不明である。ピット以外に壁溝などの付属施設は存在しなかった。

埋土は黒色土の單一層であり、上部がやや褐色をおびるが分層は不可能であった。ピットの埋土も全て黒色土である。



第14図 ST-1平面図・断面図

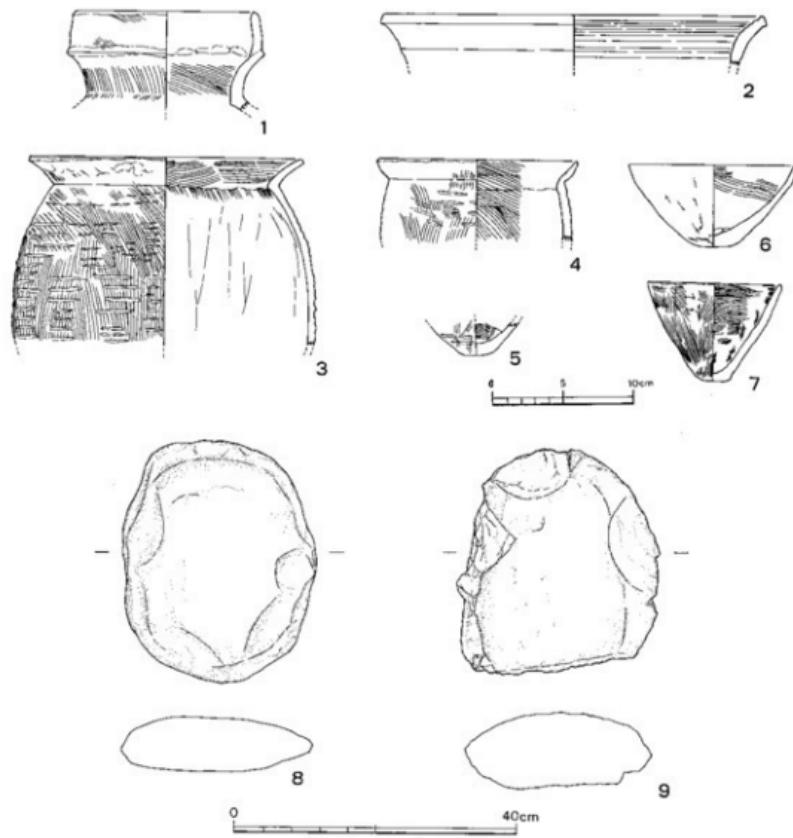
出土遺物

出土遺物は少なく、床面上からは砂岩の偏平砾を使用した大型砾石が出土したのみであり、他は埋土中の遺物である。壺は口縁部がやや内湾

する二重口縁の壺と、外反し開く広口壺の口縁部が出土している。壺は、口縁部が外反しくの字状に開くものと、内湾ぎみに開く2種類があり、両者ともに外面平行叩目にハケ調整がなされている。他は小型の鉢が2個出土しており、1点は外面をナデ調整、他の1点は叩目にハケ調整がみられる。また小さな平底の壺底部が1点出土している。（第15図1～8）

(2) ST-2

ST-2は第II調査区において検出された。平面形は円形であり直径9mを測る。壁高は最も高い部分で25cmを測り、やや浅い皿状の掘込みである。南壁と両壁に三日月状のベッド状遺



第15図 ST-2出土遺物

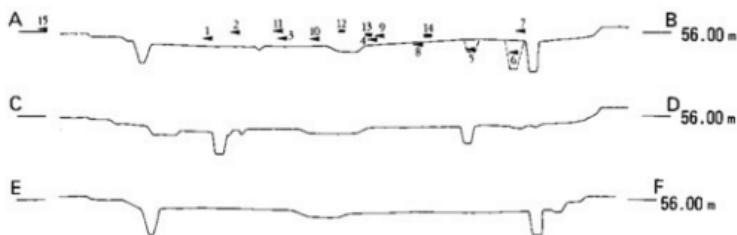
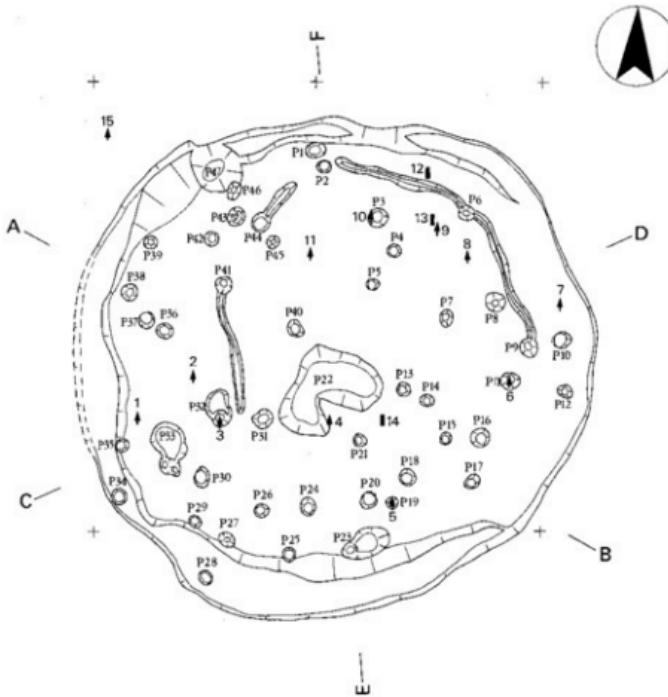
構がみられる。ベッド状遺構は床面から約10cm高く、住居址自体が壁周辺部で浅いこともあり、わずかの段差しかもっていない。床面およびベッド状遺構から検出されたビットは47個である。しかしながら、そのすべてが住居址にともなうものではなく、P36、37からは土師質の杯（第17図3・4）を出土しており、確実に中世のビットである。残りのビットの中で弥生土器を出土しているものは27個あり半数よりやや多く、土師質土器を含むものはない。しかし遺物が出土していないビットについては、住居址にともなうか否か判別できない。埋土はすべて黒色土であり、P36・37においても埋土の違いは認められず、埋土の違いによる判別も不可能である。

P22は中央ビットと考えられ、平面形はL字形をなし、皿状の深いビットであり深さは13.6cmを測る。埋土中からは少量の弥生土器片を出土している他に、底部付近に焼土が5cm前後のブロック状に若干みられ、炭化物も小片ながら混在していた。また中央ビットの北と南にも、床面上に木炭片が散在していた。しかし、中央ビットおよびその周辺部が焼けるほどの焼土、炭化物は発見されておらず、屋内炉とは考えられない。

ビットはほとんどのものが、円形もしくは椭円形であり、柱穴と考えられる。その中で深さ、柱穴間の長さなどから、P2・6・9・17・23・27・35・38・46を結ぶ9角形、もしくは、P2・6・9・17・24・32・41を結ぶ7角形の柱穴配置が推定され、特異な構造をっている。柱穴間は1.4~1.8mを測るが、1.6mを測るものが多く、基本的には1.6mと考えられる。深さは40~50cmと30cmまでの2種類に分けられる。

ビット以外の付属施設としては溝がみられる。溝は壁に添ってめぐるものではなく、ビット間をつなぐよう掘られている。P6・9に直接つながり、P2に延るもの1本。P2と41の間にP44からP2方向へ50cmと短かいもの1本。P41からP32をつなぐ溝の合計3本である。これらの溝は上記の7角形となる柱穴間をつなぐと考えられ、排水溝としての機能以外にも、何らかの上部構造に関係するものではないかと思われる。

住居址の埋土は单一黒色土であり、分層はできなかった。遺物は埋土中から多量に出土している。出土範囲は住居址全体および、埋土の上部から下部にわたり平均的に出土しており、集中する部分はない。明確に床面上の遺物としてとらえられるものは少なく、埋土下部の遺物と混在する。出土遺物は大半が細片となっており、小型の鉢が数点完形で出土したのみである。このような出土状況からみれば、埋土中の遺物はST-2に伴うものではなく、その大半は住居址廃絶時、もしくはそれ以降に廃棄されたものと考えられる。しかし出土遺物自体に時間差はみられていないので、住居址廃絶時の一括廃棄と考えられ、住居址に伴う遺物としてあつかってよいであろう。出土量はコンテナケースに8箱あり、叩目をもつ甕片が圧倒的な量を占めている。他には壺、高杯、鉢があり、中でも小型鉢が量的に多く、注目される。また特殊な遺物として、小型の円筒形土製品（第17図1）が出土している。土器以外には、鉄鎌がビット出土の2例を含め11点、鎧1点、不明鉄器2点と多量の鉄製品を出土しており、石器は、砥石1点、扁平礫の叩石が3点出土している。なお住居址の北東部、50cmほど離れた位置から鉄鎌



↑ 鉄 鋼
■ その他の鉄器

0 5m

第16図 ST-2平面図・断面図

(第23図15) が1点出土している。

番号	長 径 (cm)	短 径 (cm)	深 さ (cm)	出土遺物	番号	長 径 (cm)	短 径 (cm)	深 さ (cm)	出土遺物
P 1	40	28	6.8	なし	P 25	24	/	42.6	なし
2	24	/	42.7	弥生土器	26	28	24	39.2	弥生土器
3	36	/	27.1	"	27	32	24	36.7	なし
4	26	/	33.7	なし	28	28	20	7.1	"
5	24	20	8.9	弥生土器	29	24	/	19.9	"
6	28	/	34.0	"	30	36	24	34.6	弥生土器
7	32	20	28.4	なし	31	36	28	46.7	"
8	36	/	6.6	"	32	68 (28)	44 (28)	7.1 (39.6)	"
9	32	/	26.1	"	33	96 (42)	60 (28)	13.1 (43.8)	"
10	32	28	16.8	"	34	28	/	6.5	なし
11	34	32	51.9	鉄鎌	35	26	21	31.0	弥生土器
12	28	24	17.9	弥生土器	36	29	28	27.4	土師質杯
13	24	/	9.6	"	37	28	/	27.2	"
14	24	20	24.6	なし	38	28	/	36.5	弥生土器
15	25	/	29.6	弥生土器	39	24	/	15.5	なし
16	36	/	31.9	"	40	32	24	6.6	"
17	32	24	47.5	"	41	33	28	53.1	弥生土器
18	28	/	23.6	"	42	26	/	6.8	なし
19	20	/	15.7	鉄鎌	43	34	28	18.9	"
20	28	/	43.1	弥生土器	44	32	/	6.0	"
21	22	20	48.9	"	45	24	25	5.2	"
22	1,600	92	13.6	"	46	33	23	25.4	弥生土器
23	88 (26)	52 (—)	19.9 (44.2)	"	47	94	86	11.4	"
24	32	28	41.1	"					

第1表 ST-2ピット計測表

出土遺物

S T - 2 からは多量の遺物が出土しているが、細片が多く図示できるものは少なかった。また、ほとんどの土器に叩きがみられ、明らかに時期の異なる遺物は認められない。以下、器種ごとに、形態、技法により分類する。

壺

ほとんどが口縁部の破片であり、その形態と頸部により、A ~ C 類に分類した。

A 類 頸部から大きく外反し、ラッパ状に開く口縁部である。口縁端部の形態により、A 1 ~ A 3 類に細分した。

A 1 類 くの字状に屈曲する頸部から大きく外反する口縁端部をナデによりやや下方へ肥厚するものである。(第20図1・2・4・10) 中には端部に櫛描波状文を施すものもある。

(第20図5)

A 2 類 A 1 類と同じく、大きく外反する口縁部であり、端部が斜めに終るもの(第20図3、6)と直立する面をなすもの(第20図7~9)が存在する。

A 3 類 制部より直立する頸部をもち、口縁部は大きく外反すると思われる。(第20図12)

B 類 二重口縁の壺である。S T - 2 からは1点出土しており、やや外反気味に直立する頸部に、若干内済する口縁部をもつ。(第20図11)

壺洞部は球形に近く、最大径を中央よりやや上部にもち、平底をもっている。調整は上胴部にハケ目、下胴部は叩目にハケ目がみられる。

甕

甕は多量に出土しているが図示できるものは少なく、ほとんどが細片である。分類は壺同様に、口縁部の形態と調整、頸部の屈曲などにより A ~ G 類とした。

A 類 小型の甕で口縁部に最大径をもち、緩やかに外反する。(第19図3)

B 類 A 類同様小型の甕であり、やや長目の胴部に若干外反する口縁をもつと思われる。最大径は胴部にある。(第19図4)

C 類 くの字状に強く屈曲し、外反する口縁部をもち、頸部内面に棱がみられる。口径と口縁端部の調整により細分される。

C 1 類 口径8~12cmとやや小さく、口縁端部がナデ調整により面をなし縁取りのあるもの(第19図6~8、12)と面をなさず、丸味をおびて終るもの(第19図1、9)がみられる。

C 2 類 口径14cm以上で、C 1 類と同じく口縁端部が面をなし縁取りのみられるもの(第18図3、第19図10、11、15~17、19)と丸味をおびて終るもの。(第18図4、第19図13、20、21)

D 類 C 類に比べ、緩やかに屈曲する口縁部をもち、強く張る胴部へと続くものである。(第18図1、5、第19図14、18、23)

E類 強く張る球形に近いと思われる頸部より、くの字状に屈曲し、やや外反しつつ直線的に開く。口縁端部は面をなし縁取りをもつ。頸部内面には稜がみられる。(第18図2・6
第19図22)

F類 頸部の屈曲は緩く、口縁部は直線的に開く。端部は面をなし、頸部内面に稜をもつ。口径によりF1～F3に細分される。

F1類 口径12cmと小型のもの。(第19図5)

F2類 口径20cm前後を測るもの。(第18図7～9)

F3類 口径30cm以上の大型のもの。(第18図10)

G類 頸部をもたず、口縁部も開かず、端部が若干外反し終るもの。(第19図2)

鉢

鉢は完形に近いものも多く、小型の鉢と2種類に大別される。小型の鉢は器形と底部、口縁部の調整により、細分される。

A類 器高7～8cmに比べ、口径は16～20cmと大きく、浅く開く鉢である。底部は不安定な平底をもち、口縁部はナデ調整により面をなす。

B類 口径7～12cm(10cm前後が最も多い)、器高7cm前後を測る小型の鉢である。器形、底部などにより、4類に分類された。

B1類 小さな平底から直線的、もしくはやや内湾し立上る。口縁端部はナデ調整により丸味をおびる。(第21図3・4・8・11・12・18)

B2類 ほぼ丸底の底部から、緩やかに内湾しつつ立上る。口縁部はナデ調整により面をなすものと、未調整のものがある。(第21図5～7・9・10・14～17・20)

B3類 突出した丸底をもつ底部であり、内湾し、緩やかに立上る。(第21図13)

B4類 丸底から緩やかに立上り、内湾する。口縁部は未調整のまま外反する。(第21図19)

C類 小型手捏ねの粗製土器であり、外面に叩目がみられるものがある。口径は5cmを測る。本来、分類上鉢ではないが、便宜上C類としておく。(第21図1・2)

高杯

高杯は少なく、脚片を数点と杯部を1点出土している。形態的にはほぼ同じであるが、大きさにより2分される。

A類 脚部の底径14cm前後を測り、緩やかに開くもの(第21図28、30)と裾部でさらに大きく開くものがある。(第21図26・29)两者とも裾端部はナデ調査により面をなす。

B類 脚部底径10cmを測り、緩やかに開く。裾端部は丸くおさめる。(第21図27)

杯部は1点出土しており、緩やかに丸く内湾し、口縁部は外反する。A類の脚につくと思われる。

以上、壺、甕、鉢、高杯の4器種により分類を行ったが、他に底部が存在するので分類に応じて説明する。第22図1～9、11、13、14は小型鉢の底部であり、B1類の底部としては、1

3、6、7、9、B2類の底部は2、4、14、B3類の底部は5、8、11、13に分類される。同図の10、12、15、16、18~20は甕底部である。小さな平底をもつものが大半を占めるが、16のようにには丸底を呈するものも存在する。調整は叩目にハケが加えられる例が多いが、叩き調整だけの例も認められる。17は丸底を呈しており、甕の底部ではないかと思われるが、壺である可能性も十分に考えられる。壺底部は同図21~26であり、しっかりした平底をしており、かなり厚い。調整はやはり叩きの後にハケ調整を行なわれており、叩目はほとんど消される例が多い。

土製品

ST-2から円筒形土製器が1点出土している。全長1.4cm、上端部径0.5cm、下端部径0.7cmを測り、やや太くなっている。側面部はヘラ磨きされる。用途、性格については不明である。

鉄器

住居址内より鉄鎌11点（ピット出土2点）、鍤1点、鉄鎌基部および刀子片と思われるもの各1点、計14点出土しており、住居址外からは鉄鎌1点が出土している。ピット出土遺物はP15の底より第23図5、P11の埋土中より第23図6である。また床面上出土の鉄鎌は第23図1、8の2点である。他の鉄鎌、鍤などは埋土中から出土している。

鉄鎌も形態、重量によりA~C類に分類される。

A類 きわめて大型の鉄鎌であり、他に類例をみない特殊なものである。（第23図1）

B類 5cm前後を測る菱形のものである。頭部の形態により2種に細分される。

B1類 尖頭部の角度は鈍く、やや大きく開き、基部へとしだいに細くなってゆく。（第23図3、4、11）

B2類 尖頭部は短く、ほとんど開かずに、長い茎部をもつ。（第23図8）

C類 柳葉形の尖頭部に有茎の基部をもつ。尖頭部の形態により細分される。

C1類 全長5~8cmを測ると推定される典型的なもの。（第23図5~7、9、10、15）

C2類 尖頭部が長く、両側刃が平行し、短かい基部をもつ。（第23図2）

鍤は幅0.8cm、全長10.5cmと小型である。

石器

石器は砥石と叩石が出土している。砥石は大型鉄鎌の北30cmの床面上から出土した。断面方形で3面が砥面として使用されている。砥面は3面ともに弓状に凹んでおり、きわめてよく使い込まれている。石質は致密であり、結晶片岩と思われ、鉄器用の砥石と考えられる。（第18図5）

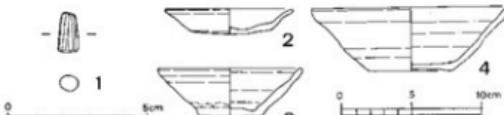
叩石は埋土中より3点出土しており、扁平の砂岩を使用している。端部または側刃部に敲打痕を残し、表面には一部磨耗した部分がみられ、使用時における手ずれの跡ではないかと思われる。（第18図6~8）

砥石の存在からは恒常的な鉄器（今回の調査では出土していないが鉄鎌など刃部をもつもの）使用が確認される一方、叩石の出土は、すべての道具が鉄器に変らず、石器の存在する最終的

段階を示すものであろう。

自然遺物

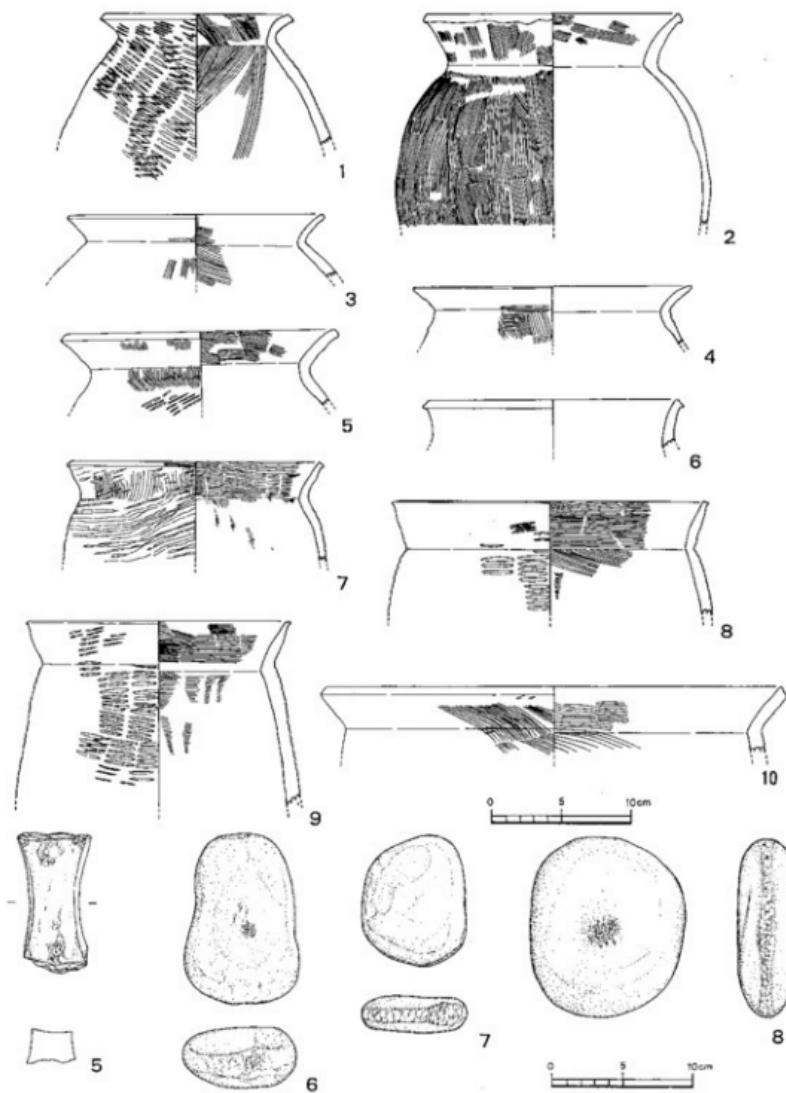
自然遺物としては炭化した種子が、P47から1点と埋土中から2点出土している。鑑定によれば、ピット出土の種子はイチイガシであり、種皮がとれており子葉が炭化したものである。（図版35-2・1）埋土出土のうち1点はトチノキの種子であり、2つに割れ、炭化している。（図版35-2・2、3）他の1点は桃核であり、野生種ではないかと思われる。（図版35-2・3）（註1）



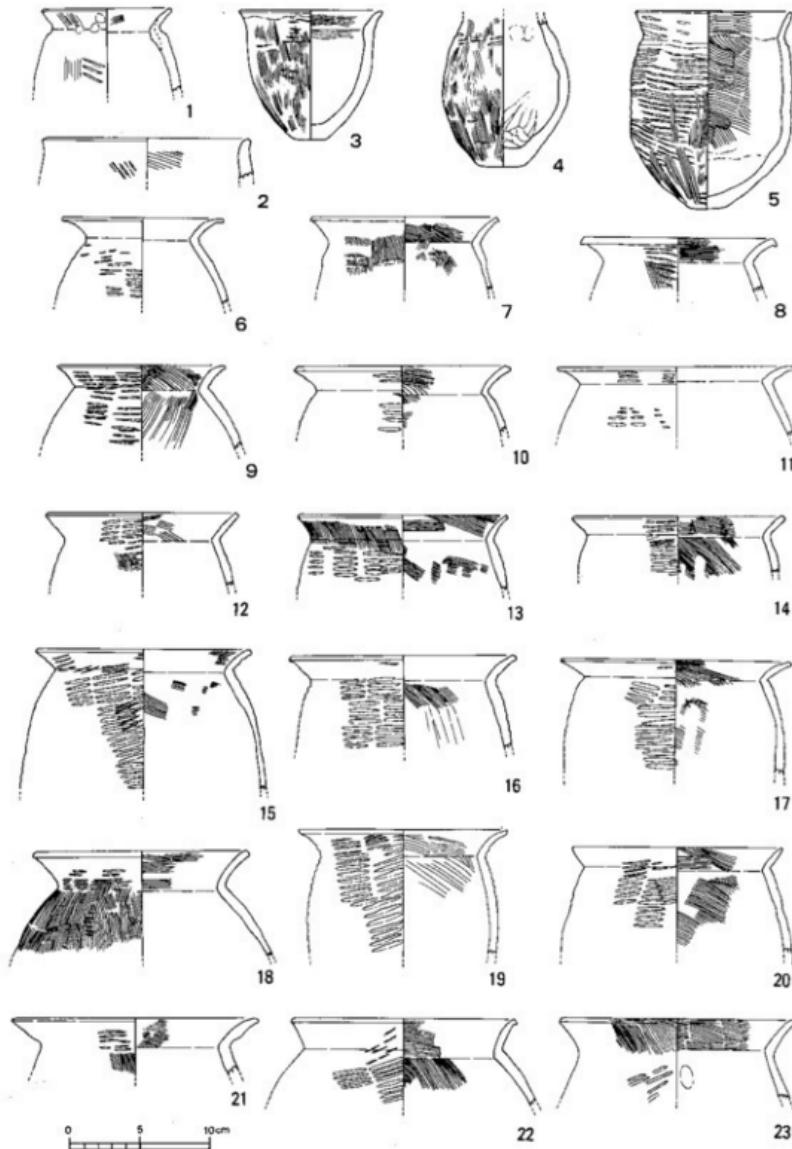
第17図 ST-2出土遺物(1)

挿図番号	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	出土遺構	備考
第20図-1	鉄鎌	11.7	3.7	0.8	41.2	ST-2 床上	大型 完形A類
〃 - 2	〃	4.0	1.2	0.4	2.9	〃 埋土	柳葉形 基部
〃 - 3	〃	4.6	2.0	0.8	5.6	〃 〃	菱形 完形B ₁ 類
〃 - 4	〃	4.7	2.4	0.5	5.6	〃 〃	〃 〃
〃 - 5	〃	2.6	1.9	0.4	2.5	〃 Pit15	先端部
〃 - 6	〃	5.7	2.3	1.1	11.1	〃 Pit11	基部欠損
〃 - 7	〃	3.8	1.9	0.6	4.6	〃 埋土	先端部
〃 - 8	〃	4.8	1.0	0.8	4.9	〃 床上	菱形 完形B ₂ 類
〃 - 9	〃	6.0	2.0	0.8	7.7	〃 埋土	先端部欠損
〃 - 10	〃	5.9	2.3	0.9	12.4	〃 〃	柳葉形 完形
〃 - 11	〃	5.1	2.0	0.5	7.1	〃 〃	菱形 完形B ₁ 類
〃 - 12	鍤	10.5	1.2	0.5	9.2	〃 〃	小型 完形
〃 - 13	不明	2.9	1.1	0.5	2.2	〃 〃	小型刃子片？
〃 - 14	〃	4.0	0.8	0.4	3.9	〃 〃	鉄鎌基部？
〃 - 15	鉄鎌	5.2	1.7	0.5	5.7	住居址外	菱形 完形
第27図-1	〃	5.3	1.9	0.7	6.9	ST-4 埋土	〃 〃
第10図-1	〃	5.5	2.2	0.9	9.2	TR-P 埋土	〃 〃

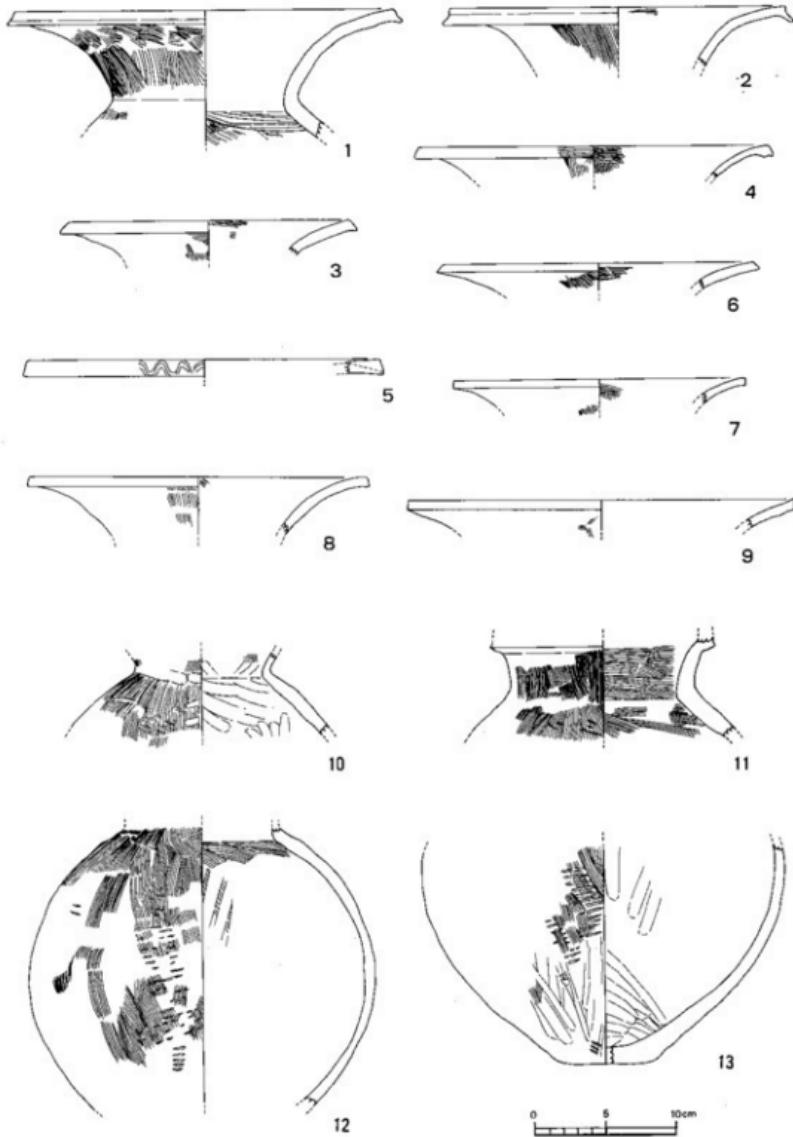
第2表 鉄器計測表



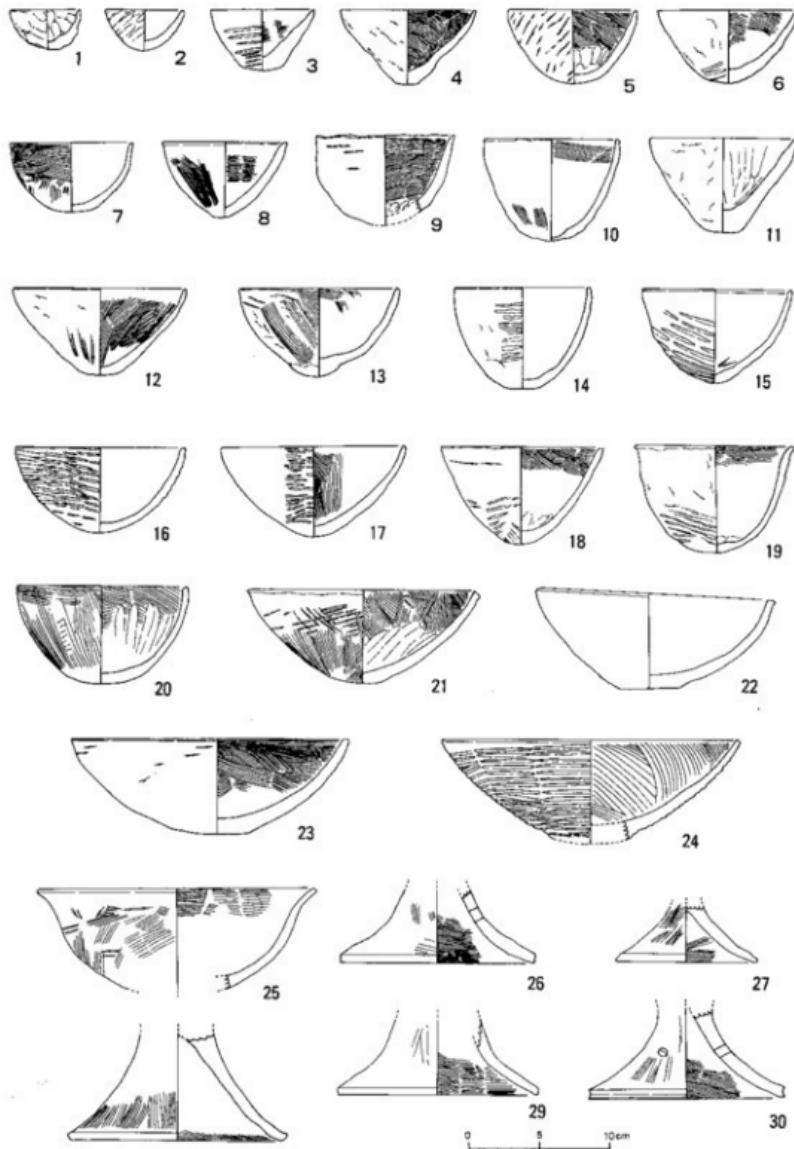
第18図 ST-2出土遺物(2)



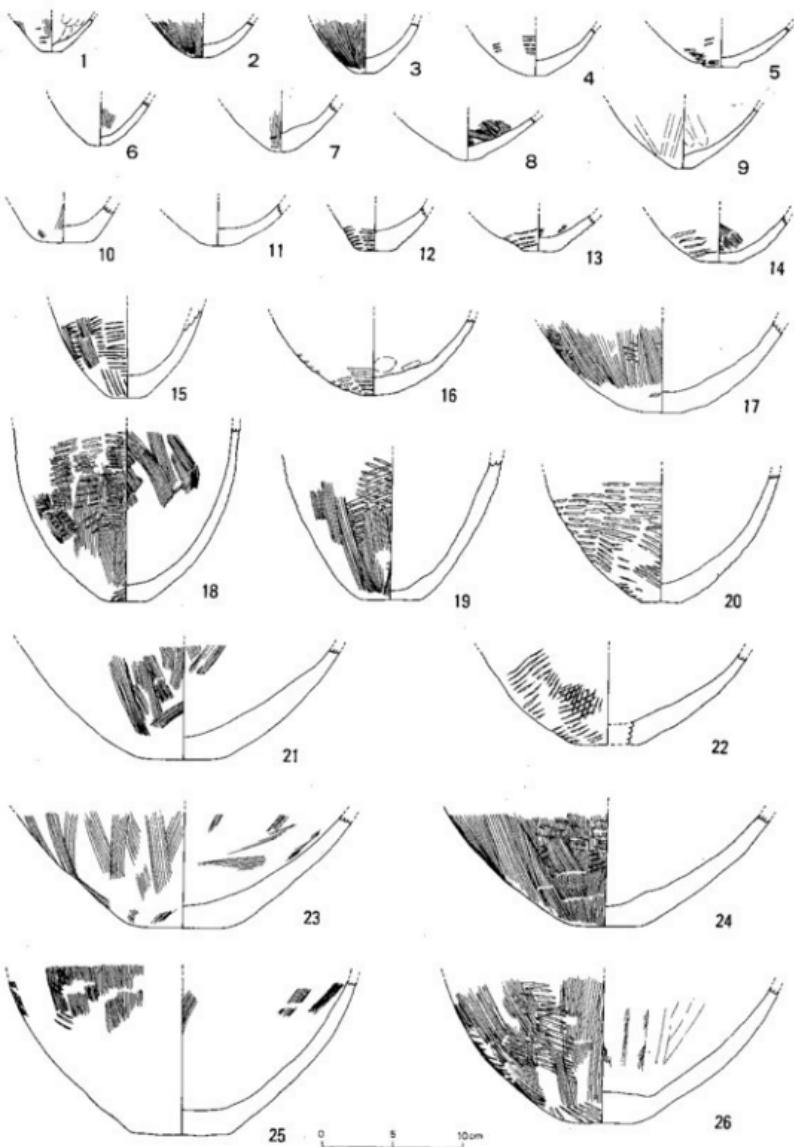
第19図 ST-1出土遺物(3)



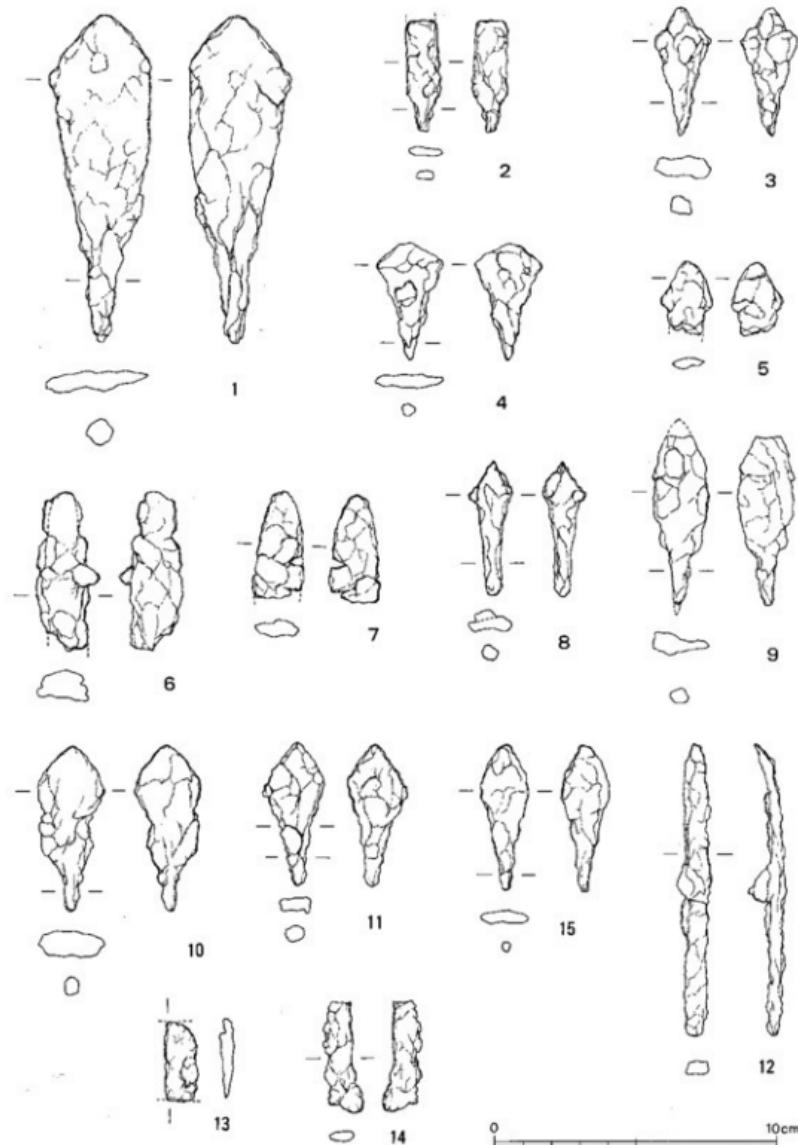
第20図 ST-2出土遺物(4)



第21図 ST-2出土遺物(5)



第22図 ST-2出土遺物(8)



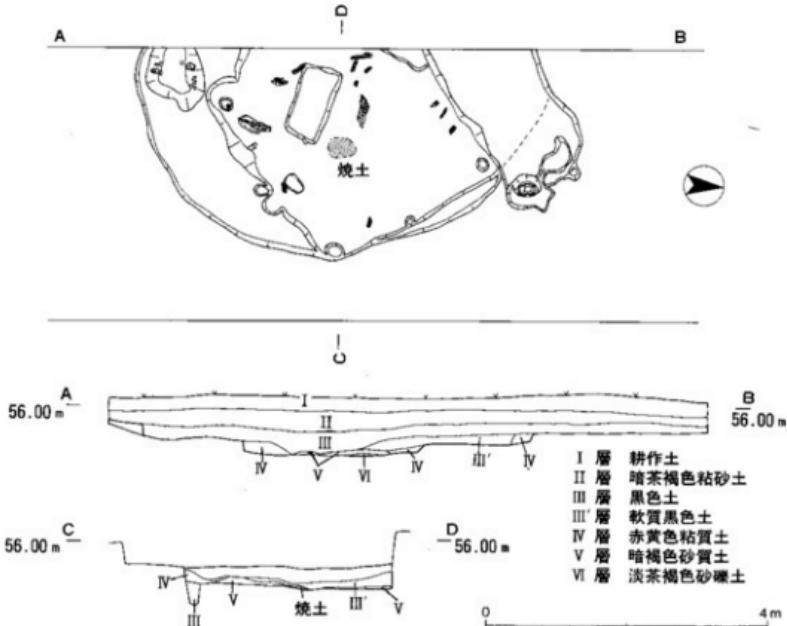
第23図 ST-2出土遺物(7)

(2) ST-3

Oトレンチ南端で検出された堅穴住居址である。遺構検出面は、淡茶褐色砂礫土であり、遺構の埋土は黒色土である。検出範囲は全体の約 $\frac{1}{2}$ であり、住居址の東側部分にあたる。

平面形は不整形な円形を呈しているが、遺構東側の輪郭から多角形住居址となる可能性がある。検出状況は、長径5.6m、短径3.0mを測り、復元規模としては長径5.6m、短径5.4mの住居址であることが推測される。住居址内には、テラス状の段（遺構南側）、土壤（テラス状の段に掘り込まれたもの）、方形を呈する堅穴（長辺2.9m、短辺2.7m）および長方形土壤、ピット4個がみられ、床面上からは、壺、甕、鉢などの弥生土器とともに匙形土製品、ソロバン玉状の土製品が出土した。

遺構内の方形堅穴では、焼土および炭化物の堆積がみられ、炭化材が遺存していた。炭化材は、長さ40cm、幅12cmのものが最も大きく、全体的には幅7~10cmで、散在して検出された。炭化材の中で、堅穴南西端部から出土したものは、長さ50cm、幅10cmを測り、ピットに接しており、ピット内にも炭化した柱痕（径12cm、遺存高10cm）が立った状態で存在していたことから、ピットとともに堅穴住居址の使用材であると考えられる。

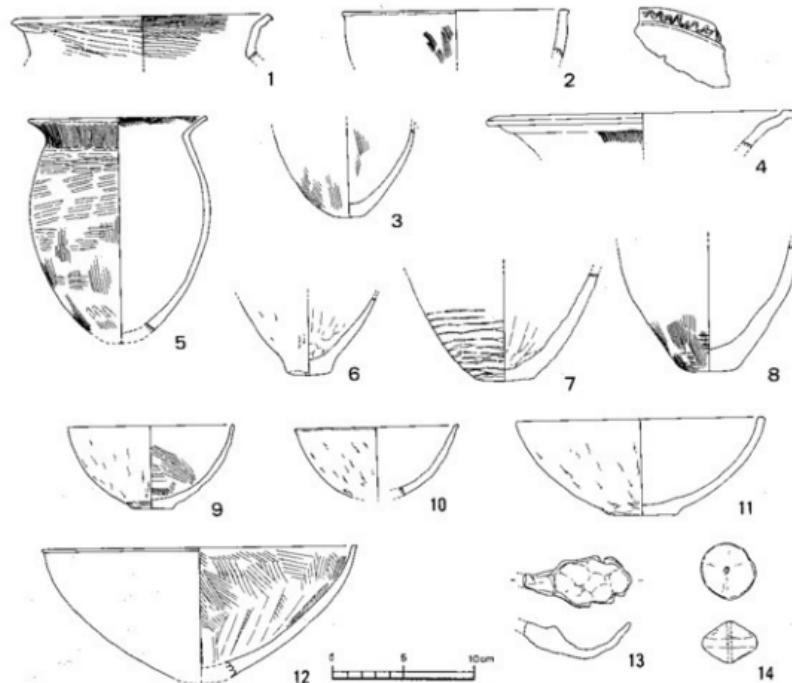


第24図 ST-3平面図・セクション図

住居址の埋土は5層に区分されるが、第IV層赤黄色粘質土（焼土層）、および第V層暗褐色砂質土（炭化物を多量に含む）は、方形の堅穴内に堆積するもので、第III層黒色土がその上部を覆っている。また、住居址床面上では、29×40cmの範囲で第V層下に焼土面がみられた。

方形堅穴からは、ピットおよび長方形土壙が検出された。ピットは計4個確認され、径4~28cm、深さ8~23cmを測る。ピットの中で3個は方形堅穴のコーナー部に位置しており、各柱穴間の距離は、遺構南東側で2.6m、北東側で2.5mである。なおピットの中には、炭化した柱根が遺存するものがあった。長方形土壙は、長径1.1m、短径0.5m、深さ約20cmを測り、埋土は暗褐色砂礫土である。

土壙は遺構内で形成されたものと、遺構外に掘削されたものがある。ST-3南側のテラス状段部に掘り込まれた土壙は、幅80~90cm、深さ約60cmの規模であり、弥生土器片が出土した。また、ST-3北東部の土壙は幅50~60cm、深さ25cmを測り、橢円形を呈し、弥生土器片が出



第25図 ST-3出土遺物

土した。いずれも S T - 3 にともなう関連遺構と考えられる。

S T - 3 は、S T - 2 の南西約40mに位置しており、調査内容からみて、火災により焼失したものであると考えられる。

出土遺物

S T - 3 の出土遺物はあまり多くなく、やはり細片が大半を占め、図示できるものは少なかった。S T - 2 の分類に基いて以下に述べる。

壺

図示できるものは 1 点のみであり、基本的には A 1 類であるが、口縁部に段をもち端部を拡張、上面に乱れた櫛描波状文をもつ。（第25図4）他の口縁部の細片も A 1 もしくは A 2 類であり、二重口縁をもつ B 類の壺はみられない。

甌

C 2 類、E 類、G 類の 3 種類がみられる。（第25図1、2、5）E 類の甌口縁はハケ調整により面をなし、端部に縁取りがみられ、口縁部下、外面に接合痕を残している。G 類の口縁部も、ナデにより面をなし、縁取りがみられる。

底部は小さな平底をもつものであり、外面に叩き、もしくはさらにハケ調整が加えられている。（第25図7、8）

鉢

鉢は A、B 類とともに出土している。（第25図3、6、9～12）A 類の鉢は S T - 2 出土の鉢と法量、調整ともにほぼ同様であり、B 類の小型の鉢には、底部だけではあるが B 1 類、さらに B 2 類、B 3 類もみられる。

土製品

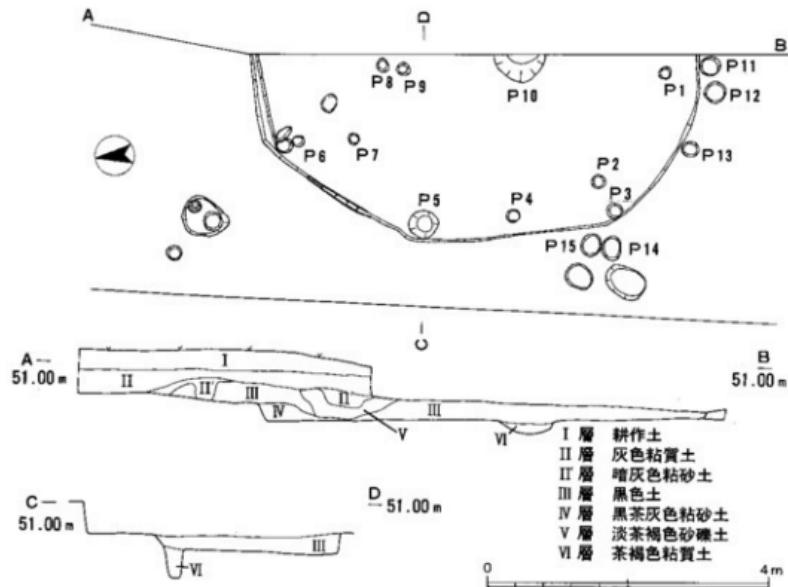
S T - 2 でも円筒形の土製品が出土したように、S T - 3 ではソロバン玉状の土製品と土製匙が出土している。ソロバン玉状の土製品は、直径2.4cm、全高1.8cmを測り、紡錘車と考えられ、磨かれている。類例として、横北高校校庭から出土している。^(註2) 土製匙は手づくねによるものであり、匙部の全長3.6cm、全幅2.2cmを測り、柄部が 1 部みられる。

鉄器は発見されていないが、住居址の約 $\frac{1}{2}$ の調査であること、また出土遺物より S T - 2 とほぼ同時期であることから、その存在は当然考えられるところである。

(4) S T - 4

P トレンチ北端で検出された堅穴住居址である。検出面は淡褐色砂礫土であり、埋土は黒色土である。S T - 4 周辺からは包含層より多量の弥生土器片が出土している。

平面形は橢円形を呈するが、S T - 4 北側の遺構の輪郭は直線的であり、多角形角住居址（八角形）と考えられる。検出範囲は全体の約 $\frac{1}{2}$ であり、住居址の西半分にあたる。検出長は、長径6.4m、短径2.6mを測る。住居址内には、土壙1基、ピット9個が確認されており、埋土は



第26図 ST-4平面図・セクション図

すべて黒色土である。床面上からは、弥生土器（壺、甕、高杯、鉢）と鉄鏃が1点出土している。また住居址に接して9個のピットが検出されている。

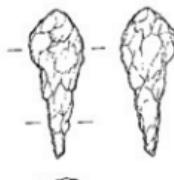
埋土は4層に区分される。I層耕作土、II層灰色粘質土、III層黒色土、IV層黒茶灰色粘質土で、地山は淡茶褐色砂礫土である。

第IV層黒茶灰色粘質土は、ST-4北側に堆積している。なおST-4東側中央部で検出されたピット（P10）の埋土は茶褐色粘質土であった。

ST-4内で検出されたピットの規模については次のとおりである。

P1（径20cm、深さ30cm）、P2（径20cm、深さ28cm）、P3（径20cm、深さ13cm）、P4（径21cm、深さ28cm）、P5（径40cm、深さ50cm）、P6（径25cm、深さ30cm）、P7（径15cm、深さ40cm）、P8（径18cm、深さ10cm）、P9（径20cm、深さ11cm）、P10（径72cm、深さ14cm）

P2、P5、P6については、住居址壁面に接して掘削されており、柱間の距離はP5～6間では2.3m、P2～5間では2.7mを測る。P10は住居址中央部で検出されており、中央ピットと考えられるが、焼土、炭化物、その他遺物は発見されていない。



第27図 ST-4出土鐵鏃

また住居址の南に隣接してP11～15が検出されており、住居址にともなうものではないかと思われる。P11～15は径23～30cm、深さはP11～13が35～45cmと深く、P14、15は8～10cmと浅く、P13からは弥生土器が出土している。

壁高は、北側で24cm、西側では20cm、南側では12cmを測り、床面は北側へ低く傾斜している。

ST-4の周辺には、Qトレンチで検出されたST-5が所在する。ST-4とST-5の距離は約20mで、Oトレンチで発見されたST-3との距離は約75mである。PおよびQトレンチの西側では、弥生土器の散布が認められ、トレンチ周辺においてST-4と同様な住居址群が埋没している可能性が高い。

ST-4の出土遺物はST-2、3とはほぼ内容的に同じであり、同時期の住居址群を形成するものであろう。

出土遺物

ST-4出土遺物としては壺、甕、鉢、高杯があり、ST-3同様、ST-2の分類を基に記述する。

壺

壺はA1類の他に、直立する頸部よりほぼ直角に開く口縁部がみられ、これをA4類として加えたい。口縁端部は他のA類同様にナデ調整により面をなすものである。またB類の二重口縁の壺はみられない。（第28図1、2）

甕

甕はC2類とG類がみられる。その他に口縁部がやや外反ぎみに直立し、開かないものが存在し、H類として新たに分類される。口縁端部はナデ調整により、尖りぎみに丸くおさめるものと、やや面をなすものがある。（第28図3～6）

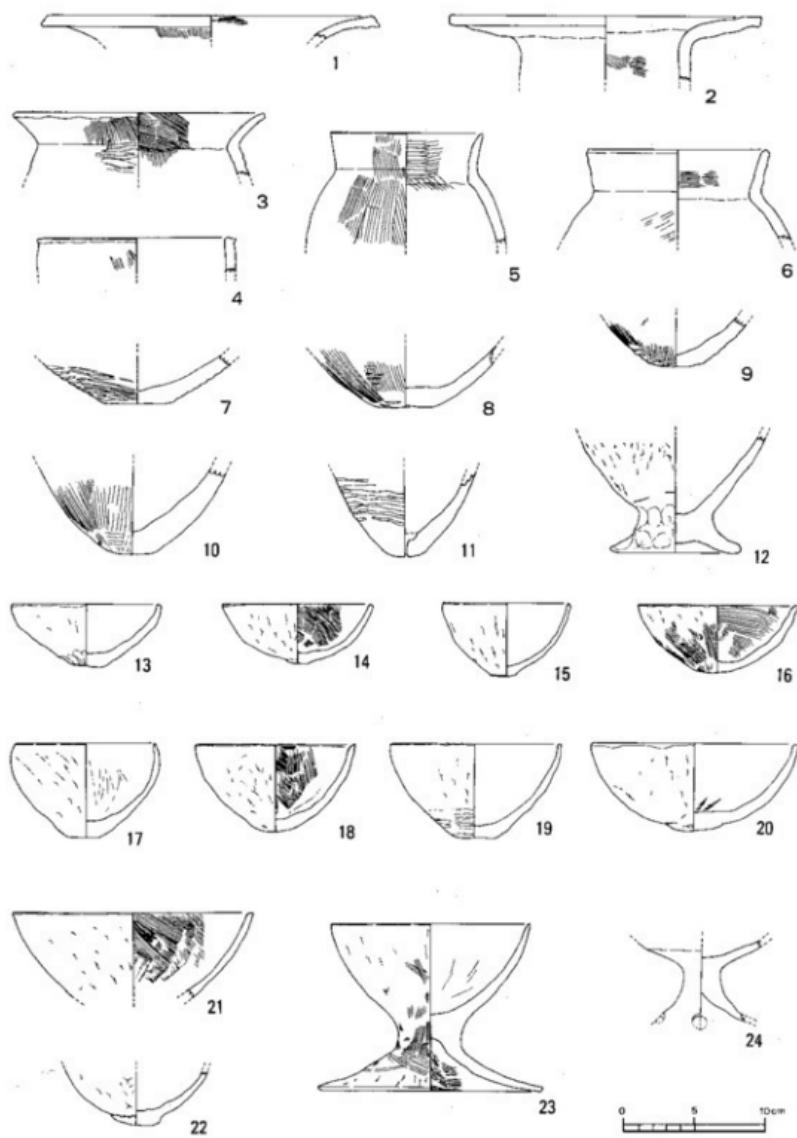
甕底部は丸味をおびた平底をもち、叩目にハケ調整をなされている。中に1点底部穿孔のものがあり、甕と考えられる。穿孔は焼成前に行なわれている。（第28図7～11）

鉢

鉢ではA類がみられず、B類と新たに台付の鉢が存在するので、これをC類とした。B類はB1～B3の3種があり、B3類には口径が9～10cmとやや大型のものがみられる。C類とした鉢は深めの体部に指頭圧痕を顕著に残す粗雑な台を付けたもので、台の端部は強く開く。（第28図12～22）

高杯

高杯は数点出土しており、A類とみられるが、その他に鉢に脚部を接合したような特異な形態をとるものがあり、C類とした。C類の杯部は小型の鉢そのままであり、短かい柱状部から大きく開く。脚端部は叩目にナデ調整しており、柱状部との間にヘラ磨きが施される。柱状部および杯部外面、脚部内面にはハケ調整がみられ、杯部内面はナデ調整である。このような形態からみれば、台付の鉢としてとらえた方がよいかもしれないが、今回は高杯として分類した。



第28図 ST-4出土遺物

A類の高杯は杯部と脚部の一部であり、脚部には円孔がみられ、A 1類と考えられる。（第28図23、24）

鉄器

S T - 4 からは鉄鍛が埋土中より 1 点出土している。全長5.3cmを測り、S T - 2 の分類に基づけば、C 1類に分類される。

以上の出土遺物より、S T - 4 も S T - 2 、3 と同時期と考えられ、弥生時代後期末に位置する集落址を形成するものである。

2. 土壙

本調査の項で述べた通り、第1調査区では弥生時代の土壙は 3 基検出されている。またトレーナーにおいても同時期の土壙が検出されているが、すでに述べられているので、ここでは触れない。

(1) SK - 1

SK - 1 は E 10 - 15 において検出された長円形の土壙である。埋土は黒色土であり、その規模は長径128cm、短径90cm、深さ42cmを測る。出土遺物は小型の鉢と甕底部が存在する。小型の鉢は B 2類であり、底部はやや尖りぎみである。甕底部は小さな平底をもち、外面に叩目、内面にナデ調整がみられる。（第11図20、23）

(2) SK - 2

SK - 2 は F 10 - 3 において検出された、SK - 1 同様長円形の土壙である。規模は長径185cm、短径86cm、深さ28cmを測り浅い。埋土は黒色土であり、遺物は叩目のある甕片を少量出土したのみである。

(3) SK - 3

SK - 3 は E 9 - 4 において検出された土壙であり、方形に近い不整形である。規模は長径256cm、短径157cm、深さ38cmを測る。SK - 2 と同じく埋土は黒色土であり、遺物は少量であったが、やはり叩目の土器が存在しており、弥生時代の土壙と考えられる。

3. ピット

ピット出土の遺物はあまり多くないが、図示できるものにより説明したい。

P 1 ~ 4 は調査区南部のピット群であり、古代と中世の遺物を出土している。P 1 は E 9 - 23 に検出され、内面にヘラ磨きをもつ土師器の杯を出土している。P 2 は F 9 - 18 に検出され高台をもつ土師器の杯が出土している。P 1 、2 は出土した土師器により、奈良から平安時代にかけて存在したと考えられる。（第11図7、9） P 3 は F 9 - 18 より検出され、土質質の小皿を、P 4 、5 は E 9 - 17 より検出されており、青磁碗の底部と瓦質の鍋を出土しているので、室町時代と推定される。（第11図2、4、11）

P 6～11は北部の弥生時代と考えられるピット群に含まれるが、F 9～18、F 10～8から検出されたP 6、7からは土師質小皿と杯が出土しており、室町時代のピットが混在しているようである。（第11図1、4）P 8～11は弥生土器を出土しているが、中でも北東部に散在するP 9～11ではやや多量の出土をみた。P 8はF 11～23より検出され、C 1類にあたる完形の小型鉢を出土した。P 9・10はE 11～25に検出され、P 9からはA 3類と思われる壺胴部、P 10ではA類の鉢を出土している。またP 9・10出土の甕片が接合しており、C 2類に分類されるが、外面全面に細く、深い叩目が連続するように施され、他の甕にはみられない丁寧な作りである。P 11はE 11～19より検出され、高杯と甕底部を出土している。高杯はS T-2およびS T-4の分類にはみられないもので、杯部に段をもち屈曲し、口縁部は大きく外反する。内外面ともにハケ調整の後に縱方向のヘラ磨きが施されるが、段部より下は密に、上部は粗く、口縁部にはみられない。また外面の段部は稜をなしている。このような高杯をD類として新たに分類する。（第11図13～16、19、22）

註1 粉川昭平教授の鑑定による。

註2 調本健児教授の御教示による。

V 総括

林田遺跡からは、今回の調査により、弥生時代後期終末の住居址、土壤、ピットなどを含む集落址が発見され、さらに古代、中世にかけてのピット群を検出することができた。特に弥生時代では遺物量も多く貴重な資料を得ることができたので、以下に各時代別に遺構、遺物をまとめてみたい。

1. 弥生時代

弥生時代の遺構としては堅穴住居址5棟が検出され、4棟が調査された。ST-1・2の平面形は円形であり、直径8~9mを測り大型である。これに対し、ST-3・4・5は直径5~7mとやや小型であり、平面形もST-3は円形（多角形の可能性もある）。であるが、ST-4は八角形、ST-5の検出プランは六角形を呈しており、2棟の多角形住居址の存在が認められる。住居址内の主柱穴はST-2では7~9個と想定され、柱穴間を結ぶ溝を考えれば、多角形住居との関連を思わせる。ST-3の柱穴配置は不明瞭であるが、ST-4では八角形の各コーナーに対応する主柱穴が検出されており、おそらく8本の柱による上部構造が考えられる。また各住居址ともに壁溝は存在せず、やや浅い中央ピットの存在とともに、円形と多角形住居址の共通性として認められる。

ベッド状遺構はST-2に三日月状のものがみられるが、他の住居址には存在しない。しかし、ST-3では中央部の大半を占める方形の堅穴があり、当初、方形住居址の重複とも考えられたが、埋土、セクションには差異が認められず、ST-3にともなうものとしたが、この場合、南北に残された部分が、やはり三日月形をなすベッド状遺構としてとられられるのではないかと考えられ、課題を残すところである。

多角形住居址は、弥生時代後期から古墳時代前期に出現することが知られているが、最近の調査により発見例が増加しているとは言え、絶対数からみれば円形、方形の住居址に比べきわめて少ない。高知県においても最初の検出例ではないかと考えるが、ヒビノキ遺跡のB-1区検出の半扇形をなす小型住居址が多角形の可能性をもつが明確ではない。県外の多角形住居の例としては播磨大中遺跡の六角形の住居址が知られているが、方形12棟、円形5棟に対し1棟であり、規模も大きくその特異性が目立つものである。しかしながら林田遺跡では、多角形をなすST-4・5は円形のST-2に比べ、比較的小さく、調査範囲内では住居址内の構造、および出土遺物に特異性は認められなかった。このような状況は滋賀県下の多角形住居にもみられ、五角形をなす平面形以外に特異性が認められない住居址が一例存在する。しかし、円形および方形を主体とする住居址群の中で、多角形という特異な平面形をもつことは、やはり集落構成の中で何らかの特殊な位置を占めていたと考えられるのではないだろうか。

高知県において、弥生時代後期終末から古墳時代前期にわたる集落址として調査された遺跡

としては、ヒビノキ遺跡と五軒屋敷遺跡が存在する。ヒビノキ遺跡では11棟の住居址が検出されており後期中葉（ヒビノキⅠ式）のベッド状遺構をもつ円形住居址1棟、後期後半～終末（ヒビノキⅡ式）ではベッド状遺構をもつ方形、隅丸方形住居址2棟、円形住居址4棟と隅丸方形住居址1棟、古墳時代前期（ヒビノキⅢ式）ではベッド状遺構をもつ方形住居址1棟、隅丸方形住居址1棟である。五軒屋敷遺跡ではヒビノキⅡ式とされた円形住居址と同Ⅲ式とされる方形住居址が検出されている。林田遺跡では方形の住居址は発見されていないが、ヒビノキ遺跡の例をみれば、後期後半に円形と方形が混在しており、後期前半の状況は田村遺跡の調査によれば方形は認められず、円形に限定されるので、円形主体から後期後半～終末にかけ円形、方形混在、古墳時代には方形に統一されるという変化が確認されている。

住居址の内部構造では、ベッド状遺構をもつものが多く、林田遺跡以外では4個の主柱穴が円形、方形ともに一般的であり、中央ピットの存在は林田遺跡を含め高知県における共通性といえる。また排水溝の存在する例は少なく、五軒屋敷遺跡の方形住居とヒビノキ遺跡の円形住居の2例であり当遺跡のS T-2・4の柱穴間の溝を排水溝とみても4例である。このような状況を見れば、基本的には近畿、瀬戸内の住居址形態に類似はしているが、後期前半よりベッド状遺構をもつ住居址の存在、後半から古墳時代にかけて、ベッド状遺構をもつ例が増加することを考えれば、北九州との関係が強かった事を考慮せざるを得ないと思う。

県内における住居址の検出例としては、他の時期に比べれば非常に多いが、確認調査もしくは部分的な発掘が多く、完掘例が少ないため、住居址自体としてもまだすべてが判明した訳ではなく、集落全体の構成とともにすれば、きわめて不明な点が多く、今後の課題として残される問題点は少なくない。

出土遺物はいずれもヒビノキⅡ式とされる範疇に入るものと考えられる。基本的な土器構成としては、壺、甕、鉢、高杯である。壺では、大きく外反する口縁をもつ壺A類と二重口縁の壺B類に大別され、A類は口縁と頸部の形態により細分される。B類の口縁部は直立および、やや内湾するものあり、ヒビノキⅢ式にみられるような外反する口縁は認められなかった。またB類においては口縁部を拡幅し粗い椭描波状文、それに加えて竹管文を施すものが数点存在しており、後期後半の口縁部に施文をもつ一群としてとられられる。胴部は球形、もしくは、中央部のやや上位に最大径をもった球形状の形態をとり、かなりしっかりした小さな平底から、やや丸底に近い底部まで存在している。底部の厚さは、丸底に近いものでもかなり厚く、確実に底部を形成しており、いわゆる丸底に該当するものは存在しない。器体の成形はすべて叩きにより、さらにハケ調整が全面に行なわれている。

甕は、くの字状に屈曲する頸部から外反する口縁部をもつものが大半を占める。頸部の屈曲、口縁端部により細分されるが、基本的には、叩きによる口縁を含めた全体の成形がなされ、ハケ調整が行なわれる。内面は、口縁部にハケ調整、以下は指ナデによる調整が多用される。

このような甕はヒビノキⅠからⅢ式にかけて主体をなすものであり、口縁部の調整などにより

大きく分類されるようだが、個体差の方が多く、ヒビノキI～IIIの型式分類には合致しないのではないだろうか。

鉢はA・B類ともにヒビノキI～III式にみられるが、器形、調整などによる細分が、型式分類としてとらえられるよりも、あくまで個体差として認められるものと考えられる。相対的には、後期前半には小型の鉢はみられず、中葉、ヒビノキI式の段階、すなわち、叩き技法の導入とともにA類の鉢より分化し、大量に生産されたものであろう。

高杯においては、A・B・D類と類似する形態を取るもののが、ヒビノキ、五軒屋敷遺跡で出土しているが、A・B類はヒビノキI、II式に、D類はヒビノキIII式に形態的には結び付くが調整に違いがみられ、また、五軒屋敷遺跡のST-2出土高杯のようにセットをなす壺、鉢類は共伴せず、やはりヒビノキII式とすべきであろう。

鉄器の出土量は弥生時代後期としては非常に多く、特にST-2の出土量は圧倒的である。しかし埋土中のものが多く、ST-2に、本来所属するものは4点であり、他の鉄器は一括放棄されたと考えられるが、これらも同一集団により所有されていたものであれば、やはり多量の鉄器が存在したことになる。しかも、大型の鉄鎌は古墳時代に属するものと思われるような形態をしており、ヒビノキ遺跡、五軒屋敷遺跡などに対する、林田遺跡を残した集団の先進性、もしくは優位性を示していると考えられる。しかしながら、ST-2出土の叩石の存在は、先進性と同時に南四国という閉鎖的な地域の後進性をも物語っているのではないだろうか。

以上のように、出土遺物からはヒビノキII式としてとられられる弥生時代後期終末の集落址が確認され、不十分ながらも一応の成果を得たと考えられる。

2. 古代～中世

古代から中世にかけても遺構としてはピット群だけであり、建物も立たなかったが、かなりの遺物を出土している。

古代においては奈良時代末から平安時代全般にかけて少量ながら遺物が出土しており、さらに周辺部に広がっていると考えられる。また灰胎陶器の出土は珍しく、産地は不明であるが他地域よりもたらされたものであり、東海、近畿地方との交流を知ることができる。さらに2点の布目瓦の出土は近隣に寺院等の存在を思わせる他に、すぐ南の加茂地区における窯業遺跡と密接に関連するものであろう。

中世においても、建物は建たなかつたが、ピット群を検出しており、土師質の杯、皿、青磁、白磁などの遺物が出土しており、室町時代にかなりの建物群が存在したと推定される。その範囲は南部を中心をもち、林田地区全域にかなり広がると思われる。

林田遺跡の調査はごく一部であったが、広範囲な弥生時代の集落を確認し、さらに古代、中世の遺跡としても発見され、確認されたことは大きな成果であった。しかし圃場整備事業によ

りやむなく破壊される部分は記録保存となつたが、その大部分が現状の水田として保存されたことは、調査の結果としては最大の成果と受け止め、今後も保存を前提とした調査が行なわれんことを期待し、努力しなければならない。

参考文献

- 1 岡本健児『高知県の考古学』 吉川弘文館 1966
- 2 岡本健児『高知県史』 考古編 高知県 1968
- 3 岡本健児・広田典夫『ひびのき遺跡』 土佐山田町教育委員会 1977
- 4 岡本健児「土佐考古学の諸問題(三)弥生後期」『高知の研究』 清文堂 1983
- 5 岡本健児『南四国における卯目のある弥生土器と土師器』『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻 同刊行会 1982
- 6 岡本健児『四国VI後期の土器』『弥生土器I』(佐原真編) ニューサイエンス社 1983
- 7 角谷和男・下村公彦他『五軒里敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会 1984
- 8 都出比呂志「古墳出現前夜の集團關係」『考古学研究』通巻80号 考古学研究会 1974
- 9 石野博信・関川尚功 他『郷向』 横原考古学研究所 1976
- 10 石野博信「住居址の地域性」『三世紀の考古学』中巻(森浩一編) 学生社 1981
- 11 泉武『東安堵遺跡』 横原考古学研究所 1983
- 12 和島誠一・田中義昭『6住居と集落』『日本の考古学III弥生時代』 河出書房新社 1966
- 13 田路正幸「128.近江八幡市堀ノ内遺跡の五角形住居址について」『滋賀文化財だより』A6
93 財團法人滋賀県文化財保護協会 1984

第3表 出土土器觀察表(1)

博覧番号	遺構番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
7-1	TR-H	土師質 小皿	6.6 1.7 — 4.0	直線的に開く	回転糸切り	磨耗する
2	TR-K	#	7.8 1.3 — 4.9	#	回転糸切り 内面クロ目	
3	#	#	8.4 1.4 — 5.7	底部はやや上り、外反ぎみに 開く	#	
4	#	#	8.8 1.6 — 6.3	底部は丸味を含び、外反ぎみ に開く	回転糸切り 板目を残す	
5	TR-L	土師質 皿	11.4 1.7 — 8.0	浅く緩やかに開く	#	磨耗する
6	TR-K	#	14.0 2.3 — 9.8	内湾ぎみに開く	口縁ナデ	
7	#	瓦質 皿	14.4 3.1 — 7.8	#	#	磨耗する
8	#	土師質 皿	15.6 3.1 — 10.0	#	#	明赤褐色
9	#	須恵器 杯	13.2 (4.8) — —	直線的に開き、外反する	#	胎土、粗く砂粒 を含む 青灰色
10	#	土師質 杯	10.6 3.1 — 4.0	緩やかに内湾し立上り、口縁 部は外反する	#	
11	#	#	14.2 4.0 — 7.2	#	#	明褐色
12	#	白磁 碗	13.2 (2.0) — —	玉縁状の口縁下に浅い凹線		白灰色の施釉
13	#	#	13.8 (2.3) — —	#		やや縁がかった 白灰色釉
14	#	#	18.6 (3.3) — —	#		白く濁った白色 釉
15	#	須恵器 杯	19.6 (4.2) — —	緩やかに内湾し、口縁部は外 反する		明灰色

第3表 出土土器観察表(2)

辨証番号	遺構番号	器種	口徑 法量 (cm) 高 底径	形態・文様	手 法	備 考
7-16	TR-K	須恵質 椀	14.4 (3.2) — —	緩やかに開き、口縁部は外反する	外面にロクロ目	暗灰色
17	"	土師質 杯	12.6 3.9 — 6.2	"	外面にロクロ目 回転糸切り	
18	TR-K P1	須恵質 杯	14.0 5.6 — 6.0	緩やかに開き、口縁部は外反する 底部は厚い	"	暗灰色
19	TR-L	土師質 杯	10.8 4.7 — 6.0	直線的に開く	外面にロクロ目 回転糸切り 板目を残す	
20	TR-H	"	14.0 3.7 — 6.0	直線的に開く 口縁部は外反する	外面にロクロ目 回転糸切り	磨耗する
21	TR-K	灰胎 椀	16.0 5.4 — 7.6	緩やかに内済し開く 口縁部は外反する 断面三角形の低い高台	外面ロクロ目 口縁、高台ナデ	
22	"	青磁 椀	(4.0) — 6.1	断面台形の高台 縁やかに立上る	高台内面はケズリ、施釉なし	暗灰色の胎土 暗緑色の施釉
23	"	青磁 皿	12.8 (2.5) — —	外面に棱をもち外反する 口縁部には、輪花がみられる		暗灰色の胎土 明青緑色の施釉
24	TR-C	甕	(7.7) — 2.0	平底にやや長い脚部 口縁部は外反する。	外面 左上の叩きをナチ消す 底部はハケ調整 内面 指頭圧痕	
25	TR-K	土鍋	全長3.8 径 2.3			
26	"	"	全長3.5 径 0.9			
27	TR-O	土師質 杯	14.0 3.7 — 8.2	直線的に開く 口縁部は外反する	回転糸切り	
28	TR-P	"	(2.4) — 6.6	底部より緩やかに開く 丸味をおびた高台		磨耗する
29	TR-O	瓦質 杯	(2.3) — 6.6	底部より緩やかに開く	回転糸切り 外面にロクロ目	"
30	"	土師質 杯	(2.8) — 6.8	"	回転糸切り	"

第3表 出土土器観察表(3)

掲番号	遺構番号	器種	口径 器高 法量 (cm) 底径	形態・文様	手 法	備考
7-31	TR-K	須恵器 壺	36.4 (6.5) — —	口縁部は外反し、端部はナデ上げる	外面 格子目の叩き	暗灰色
32	TR-A	土師質 土釜	14.4 (16.8) 27.8 —	球形の胴部中央に鶴がいつく 口縁部は直立し、上胴部に2 個の取手をつける	外面 口縁部はナデ 内面 ハケ調整	赤褐色
33	TR-K	瓦質 鉢	27.0 (5.7) — —	外反し開く	外面 ハケ調整 口縁 ナデ	暗灰色
34	TR-A	須恵器 甕	— (7.9) — 16.6	直線的に開く	外面 左上りの施い叩き	#
8-1	TR-N	壺	20.8 (2.6) — —	丸く屈曲し外反する	内・外面ともにハケ調整	磨耗する
2	#	#	24.0 (2.1) — —	大きく外反し、水平にのびる	#	胎土、焼成良好
3	#	鉢	11.2 6.4 — —	小型の鉢であり、丸底から緩 やかに内済しつつ立てる	外面 叩きをナデ消す 内面 ナデ	#
4	#	高杯	(3.2) — 19.2	大きく外反し、端部は水平に 開く	内・外面ともにナデ	#
5	TR-O	壺	19.6 (2.8) — —	大きく外反し、端部を上下に 拡張する。拡張部に4条の櫛 波状文と3段の竹管文がみ られる	外面 ハケ調整 内面 ハケ調整に粗い磨き	#
6	#	甕	(5.6) — 1.4	小さな平底	外面 右上りの叩きをナデ消 す 内面 ナデ	#
7	#	#	13.5 (4.1) — —	くの字状に屈曲する口縁部	外面 叩き 内面 ハケ調整 頸部に接合痕あり	#
8	#	壺	(7.0) 28.0 —	直立ぎみに立てる頸部	内・外面ともにハケ調整	#
9	#	鉢	17.4 6.9 — 2.5	緩やかに内湾し、開く 平底をもつ	内・外面ともハケ調整 内面はハケ目をナデ消す	#
10	TR-P	#	9.6 4.5 — —	小型の鉢であり、小さな丸底	外面 叩きをナデ消す 内面 ハケ調整	#
11	#	壺	(8.0) — —	直立する頸部 頸部は非常に薄い	外面 ハケ調整 内面 頸部直下に右から左へ のヘラ削り	#

第3表 出土土器観察表(4)

拂区番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 器高 肩径 底径	形態・文様	手 法	備 考
8-12	TR-P	壺	13.6 (6.2) — —	直立し、緩やかに外反する	内・外面ともにハケ調整	胎土、焼成良好
13	#	甕	16.2 (5.4) — —	やや緩やかに屈曲する	外面叩きをナデ消す	磨耗する
14	#	#	17.1 (4.8) — —	直立する頸部から直線的に外反する 口縁部は下方にやや肥大する	内外ともにていねいなハケ調整	胎土、焼成良好
11-1	E10-3 P 7	土師質 小皿	5.0 1.6 — 3.0	やや丸味をおびた底部		
2	E9-18 P 3	#	5.6 1.6 — 4.0	口縁部は外反する	圓軸糸切り	
3	F10-8 P 6	土師質 皿	10.6 (1.8) — 8.4	直部は大きくゆがむ	底部に板目を残す	
4	#	土師質 杯	10.4 (3.5) — —	直線的に開く	口縁部ナデ	黒褐色
5	第I調査区	頬張質 杯	12.6 (3.3) — —	#	外面にクロ目を残す	暗青灰色
6	第II調査区	土師質 椀	15.4 4.3 — 6.6	浅く緩やかに開く 断面台形の高台	圓軸糸切り 内・外面ともにナデ	白褐色
7	F9-23 P 1	土師器 杯	15.4 4.0 — 10.0	直線的に開く 口縁内面に浅い沈線	内面 ヘラ磨き 口縁部ナデ	赤褐色 外面 磨耗する
8	第I調査区	#	14.0 3.7 — 10.2	直線的に開く	内面 口縁下、底部にヘラ磨き	赤褐色
9	F9-18 P 2	#	13.4 3.9 — 9.2	直線的に開く 断面台形の高台	内・外面ともにナデ	#
10	F9-17 P 4	青磁 碗	(3.6) — 5.0	直線的に開く	高台内部は、施釉をカキ取る	淡灰緑色の釉
11	F9-17 P 5	瓦質 鍋	16.6 (6.3) 17.8 —	やや開く口縁部	口縁部ナデ	磨耗する
12	第II調査区	土師質 鍋	26.0 (8.5) — —	口縁部は大きく開き端部は面をなす	外面 一部叩き 内面 ナデ	胎土、焼成良好 煤が付着する

第3表 出土土器觀察表(5)

鉢図番号	遺構番号	器種	口径 法量 器高 胸径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備考
11-13	E11-19 P11	高杯	24.2 (7.5) — —	口縁部は大きく外反し、外側に棱をもち、2段に屈曲する	内・外面ともにハケ調整に、粗いヘラ磨き	暗褐色
14	E11-25 P9・10	甕	15.7 (15.2) — —	くの字状に屈曲する	外面 左上りの細い連続印き 内面 ハケ調整。下部は指ナデ	胎土、焼成良好
15	E11-25 P9	壺	— (23.9) 23.6 —	最大径をやや上部にもつ卵形の胸部	外面 下部は右上り、上部は平行印きをハケ消し 内面 指ナデ	
16	E11-25 P10	鉢	16.4 6.4 — 5.2	やや丸味をもつ平底	外面 右上りの印きをナデ消し 内面 ハケ調整	
17	第II調査区	壺	13.0 (4.6) —	くの字状に屈曲する	外面 ハケ調整	磨耗する
18	#	甕	13.2 20.5 16.2 3.4	くの字状に屈曲する 小さな平底	外面 平行印き、下部をハケ消し	
19	F11-23 P8	鉢	3.3 4.1 — 1.6	小型の鉢、小さな平底	内面 ハケ調整	
20	E10-15 SK-1	#	10.6 7.1 — —	小型の鉢、やや尖りぎみの底部	内面 ハケ調整	磨耗する
21	第II調査区	#	9.6 8.3 — 2.0	小型の鉢、小さな平底	外面 右上りの印き、ナデ消し 内面 ナデ	#
22	E11-19 P11	甕	15.0 — 3.6	平底をもつ	外面 右上りの印き、ハケ消し	
23	E10-15 SK-1	#	— (6.0) — 2.0	丸味をおびた小さな平底	外面 平行印き 内面 ハケ調整	
24	第II調査区	瓦	全長 (12.8) 全厚 3.0		外面 印き 内面 布目	
25	第I調査区	#	全長 (7.6) 全厚 1.6		#	
13-1	第III調査区	土師質 小皿	6.4 1.2 — 4.8		回転糸切り	
2	#	#	(7.2) 2.0 — 1.2		#	

第3表 出土土器觀察表(6)

拂区番号	遺構番号	器種	口径 器高 法量 (cm) 底径	形 態 文 様	手 法	備 考
13-3	第III調査区	土師質 皿	12.8 2.6 — 4.8	浅く開く	外圍 指彎压痕 口縁部ナデ	
4	D4-12 SK-1	白磁 柄	16.4 (2.1) — —	玉縁状の口縁部		灰白色の施釉
5	"	土師質 杯	— (2.8) — 5.2	外反し直線的に開く	回転糸切り 内面にロクロ目	
6	第IV調査区	"	12.7 4.3 — 4.7		回転糸切り 内・外面にロクロ目	
7	D4-22 P 1	唐津系 皿	13.2 3 — 4.4	口縁端部は水平に開く 内面に棱をもつ	内面に重焼き底として砂粒が付着	緑褐色の施釉
8	D4-17 P 3	備前 檜木	28.8 (5.8) — —	口縁部は直立し、上方へ拡幅 6~7本の檜目が見られる		赤褐色
9	D4-22 P 2	青磁 椀	— (4.4) — 6.9	断面台形の細い高台 内面に印花文がみられる		青緑色の施釉
15-1	ST-1	壺	12.4 (7.1) — —	二重口縁であり、直立し、内 湾込みに終る	内・外面ともにハケ調整 口縁内面に接合痕あり	
2	"	"	19.0 (13.3) — —	外反し、開く口縁部	外圍 ナデ 内面 粗いハケ調整	
3	"	甕	26.8 (3.6) — —	くの字状に屈曲し、やや外反 ぎみに開く	外面 平行叩きをハケ消し、 口縁部にはナデ 内面 口縁部ハケ調整、以下 粗ナデ	胎土、焼成良好 赤褐色
4	"	"	14.0 (5.8) — —	くの字状に屈曲、内湾し開く	外面 平行叩きをハケ消し、 口縁部にはナデ 内面 全面ハケ調整	胎土、焼成良好
5	"	鉢	(2.2) — 1.8	小さな平底	外面 叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	
6	"	"	12.0 5.8 — 2.1	小さな平底から内湾し立上る	外面 叩き(?)ハケ調整 内面 ハケ調整	胎土、焼成良好
7	"	"	9.3 7.1 — 1.7	小さな平底から直線的に開く	外面 叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	磨耗する
18-1	ST-2	甕	14.8 (9.4) — —	緩やかに屈曲し、外反する短 かい口縁部	外面 平行叩きの上に右下り の叩き 内面 ハケ調整	胎土、焼成良好 淡赤褐色 砂粒を含む

第3表 出土土器観察表(7)

押出番号	遺構番号	器種	口径 器高 法量 (cm) 胴径 底径	形態・文様	手 法	備 考
18-2	ST-2	甕	17.8 (15.0) — —	緩やかに屈曲、やや外反し開く	外面 平行叩きを全面ハケ消し 内面 口縁部ハケ調整、以下指ナデ	胎土、焼成良好 淡褐色
3	#	#	15.9 (6.4) — —	くの字状に屈曲する	外面 叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	
4	#	#	19.8 (4.2) — —	緩やかに屈曲し外反する	外面 叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	磨耗する
5	#	#	18.9 (5.4) — —	"	外面 右上りの叩き、口縁部はハケ消し 内面 口縁部ハケ調整	
6	#	#	17.6 (3.5) — —	やや外反して開く		磨耗激しい
7	#	#	17.6 (7.0) — —	緩やかに屈曲し開く	外面 右上り叩き、口縁部にハケ調整 内面 口縁部にハケ調整、以下ナデ	
8	#	#	21.6 (8.1) — —	直線的にやや開く	外面 平行叩き、口縁部ナデ消し 内面 ハケ調整	胎土、焼成良好 淡褐色
9	#	#	18.0 (13.1) — —	"	外面 やや右下りの叩き 内面 口縁部ハケ調整	胎土、焼成良好
10	#	#	32.2 (5.2) — —	"	外面 叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	
19-1	#	#	9.2 (6.0) — —	くの字状に屈曲、短く開く	外面 右下りの叩きをハケ消し 内面 口縁部ハケ調整	磨耗する
2	#	#	14.8 (3.2) — —	頭部はなく、口縁部をやや外反させる	内・外面ともに粗いハケ調整	
3	#	#	10.0 9.1 — 1.0	小型の甕で、口縁は外反し開く。鉢に近い器形である	外面 全面叩きをハケ消し 内面 口縁部にハケ調整	
4	#	#	(10.5) 8.8 3.2	小型の甕で小さな平底をもつ	外面 叩きをハケ消し 内面 指ナデ、指頭圧痕	
5	#	#	11.2 14.1 — 2.4	小型の甕で直線的な胴部からやや屈曲し開く	外面 平行叩き、底部は右下りの叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	
6	#	#	11.4 (6.2) — —	くの字状に強く屈曲し、外反する	外面 叩き 内面 ナデ	磨耗する

第3表 出土土器観察表(8)

押出番号	遺構番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
19-7	ST-2	甌	12.9 (5.3) — —	くの字状に屈曲してやや外反する	外面 粗い叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	
8	#	#	13.4 (3.9) — —	くの字状に屈曲してやや外反する 口縁端部に縁取りがみられる	外面 やや右下りの叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	
9	#	#	11.0 (6.1) — —	くの字状に強く屈曲し外反する	外面 平行叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	胎土、焼成良好
10	#	#	14.7 (5.1) — —	くの字状に強く屈曲し外反する 口縁端部が面をなす	外面 平行叩き 内面 ハケ調整	#
11	#	#	16.8 (5.2) — —	くの字状に強く屈曲し外反する	外面 平行叩き 内面 不明	磨耗する
12	#	#	13.2 (5.2) — —	くの字状に屈曲し直線的に開く	外面 平行叩きをハケ消し 内面 不明	
13	#	#	14.6 (5.3) — —	くの字状に屈曲しやや外反する	外面 平行叩き、口縁部ハケ消し 内面 不明	
14	#	#	14.6 (4.0) — —	やや緩やかに屈曲し開く	外面 平行叩き 内面 不明	胎土、焼成良好
15	#	#	15.0 (9.9) — —	くの字状に屈曲してやや外反する	外面 平行叩きに右上りの叩きが混る 内面 不明	#
16	#	#	15.6 (6.7) — —	#	外面 平行叩き 内面 不明、指ナデ	
17	#	#	16.0 (6.7) — —	くの字状に強く屈曲し、外反する	外面 平行叩きに右下りの叩きが混る 内面 不明、指ナデ	
18	#	#	15.2 (7.5) — —	くの字状に屈曲して外反する 底部は張る	外面 平行叩きをハケ消し、 口縁部は残る 内面 不明、指ナデ	
19	#	#	14.8 (8.9) — —	くの字状に屈曲して外反する	外面 右上りの叩き 内面 不明	胎土、焼成良好
20	#	#	14.6 (6.6) — —	くの字状に屈曲し、直線的に開く	外面 右上りの叩き 内面 不明	
21	#	#	17.0 (5.3) — —	#	外面 平行叩きをハケ消し 内面 不明	

第3表 出土土器觀察表(9)

標図番号	遺構番号	器種	口径 器高 法量 (cm) 銅添 底底	形態・文様	手 法	備考
19-22	ST-2	甕	15.6 (6.3) — —	くの字状に屈曲して外反する 口縁端部に縁取りをもつ	外面 右上りの印き 内面 ハケ調整	
23	#	#	16.0 (5.7) — —	やや緩やかに屈曲し、直線的に開く	外面 右上りの印きをハケ消し 内面 ハケ調整	
20-1	#	壺	26.6 (9.2) — —	大きく外反し開く 口縁端部を肥厚させる	外面 粗いハケ調整 内面 ハケ調整	粘土、焼成良好 赤褐色
2	#	#	23.8 (4.3) — —	#	外面 ハケ調整 内面 ハケ調整	
3	#	#	19.8 (2.6) — —	大きく外反し開く 口縁端部は面をなす	#	
4	#	#	29.6 (2.3) — —	大きく外反し開く 口縁端部を肥厚させる	#	
5	#	#	24.8 (1.2) — —	大きく外反し開く 口縁端部を肥厚させる 粗い構造波状文をもつ		
6	#	#	22.2 (2.0) — —	大きく外反し開く	外面 ハケ調整 内面 ハケ調整	
7	#	#	20.2 (3.1) — —	#	#	
8	#	#	23.8 (4.2) — —	#	#	
9	#	#	27.3 (2.0) — —	大きく外反し開く 口縁端部はやや内湾ぎみとなる	#	
10	#	#	— (5.9) — —	やや緩やかに屈曲し、開く	外面 右下りの印きをハケ消し 内面 口縁部にハケ調整、以下指ナデ	
11	#	#	— (7.2) — —	二重口縁の頸部でやや外反し立てる 口縁部は直立する	外面 印きをハケ消し 内面 ハケ調整を指ナデ	
12	#	#	(19.3) 24.4 —	球形のよく張った頸部 直立する頸部をもつ	外面 印きをハケ消し 内面 ハケを指ナデ	
13	#	#	(15.6) — 5.0	しっかりした平底をもつ 球形に近い頸部	外面 やや右上りの印きをハケ消し、底部はヘラナデ 内面 指ナデ	

第3表 出土土器観察表(1)

持団番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・文様	手 法	備 考
21-1	ST-2	鉢	4.9 2.8 — —	手捏ね土器		黒褐色
2	〃	〃	5.6 2.9 — —	〃	外面に叩き	〃
3	〃	〃	7.4 4.3 — 3.0	小型の鉢 小さな平底	外面 平行叩き 内面 ハケ調整	
4	〃	〃	9.6 5.3 — 2.4	小型の鉢 小さな平底 口縁部は内湾する	外面 右下りの叩きをナデ消し 内面 全面ハケ調整	
5	〃	〃	8.8 5.4 — —	小型の鉢 丸底	外面 右上りの叩きをナデ消し 内面 ハケ調整、底部は指ナデ	
6	〃	〃	9.7 5.1 — —	〃	外面 右上りの叩きをナデ消し 内面 ハケ調整	
7	〃	〃	8.8 4.9 — —	〃	外面 ハケ調整 内面 不明	磨耗する
8	〃	〃	8.8 5.3 — 1.3	小型の鉢 小さな突出する平底 直線的に開く	外面 〃 内面 〃	
9	〃	〃	9.8 6.5 — —	小型の鉢 丸底 口縁部は未調整	外面 叩きをナデ消し(?) 内面 全面ハケ調整	磨耗する
10	〃	〃	9.9 7.3 — —	〃	外面 叩きをナデ消し(?) 内面 ハケ調整	〃
11	〃	〃	10.3 6.7 — 2.4	小型の鉢 小さな平底 直線的に開く	外面 叩きをナデ消し 内面 指ナデ	
12	〃	〃	12.4 6.2 — 3.4	小型の鉢 小さな平底 直線的に開き口縁部は内湾する	外面 細いハケ調整 内面 全面ハケ調整	
13	〃	〃	10.2 6.2 — —	小型の鉢 小さな突出する丸底	外面 右下りの叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	
14	〃	〃	9.6 7.0 — —	小型の鉢 小さな平底 内湾ぎみに立上る	外面 平行叩きにナデ 内面 不明	内面磨耗する
15	〃	〃	10.6 6.7 — —	小型の鉢 尖りぎみの丸底	外面 右下りの叩き 内面 指ナデ	

第3表 出土土器觀察表(1)

排列番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 胴徑 底径	形態・文様	手 法	備考
21-16	ST-2	鉢	12.0 6.1 — —	小型の鉢 丸底	外面 平行叩きに右下りの叩きが混る 内面 ナデ	
17	#	#	13.0 6.4 — —	#	外面 平行叩きに右上りの叩きが混る 内面 ハケ調整	
18	#	#	11.0 6.7 — —	小型の鉢 丸底 直線的に開く	外面 右上りの叩きをナデ消し 内面 口縁部ハケ調整。以下指ナデ	
19	#	#	11.2 7.6 — —	小型の鉢 丸底 口縁部は外反する	外面 右下りの叩きをナデ消し 内面 口縁部ハケ調整。以下指ナデ	
20	#	#	12.0 7.0 — —	小型の鉢 丸底	外面 右上りの叩きをハケ消し 内面 ハケ調整に指ナデ	
21	#	#	16.2 6.7 — 3.5	鉢 やや突出する平底 口縁端部はナデにより面をなす	外面 右上りの叩きをハケ消し 内面 口縁部ハケ調整に指ナデ	
22	#	#	17.0 7.2 — 4.4	#	外面 叩きをナデ消し 内面 ナデ	
23	#	#	20.6 6.8 — 4.4	#	外面 叩きをナデ消し 内面 ハケ調整	
24	#	#	20.6 7.4 — 5.6	#	外面 平行叩きを残す 内面 全面ハケ調整	
25	#	高杯	19.8 (7.1) — —	杯部 緩やかに立上り口縁部は外反する	外面 叩きを粗いハケ消し 内面 口縁部ハケ調整。以下ナデ	
26	#	#	(6.4) — 13.8	脚部 緩やかでやや大きく聞く 円孔がみられる	外面 ハケ調整に裾部はヘラ磨き 内面 ハケ調整	
27	#	#	(4.0) — 9.8	脚部 縮部径は小さく、直線的に聞く	内・外面ともにハケ調整	
28	#	#	(7.6) — 14.8	脚部 緩やかに聞く	#	
29	#	#	(5.3) — 14.0	脚部 端部で大きく聞く	内面 ハケ調整	外面は消耗する
30	#	#	(6.4) — 13.8	脚部 緩やかに聞き端部はナデにより凹む 円孔がみられる	外面 ヘラ磨きがみられる 内面 ハケ調整	

第3表 出土土器觀察表(II)

拂団番号	遺構番号	器種	口径 器高 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
22-1	ST-2	鉢	— (2.6) — 1.2	小型鉢底部 小さな平底	外面 叩きをハケ消し 内面 指ナデ	
2	#	#	— (2.7) — —	小型鉢底部 丸底	外面 ハケ調整 内面 ナデ	
3	#	#	— (3.5) — (1.6)	小型鉢底部 小さな平底	#	
4	#	#	— (3.4) — —	小型鉢底部 丸底	外面 叩きをナデ消し 内面 ナデ	
5	#	#	— (2.9) — 2.6	小型鉢底部 小さな突出する平底	#	
6	#	#	— (3.3) — 1.8	小型鉢底部 小さな平底	内面 ハケ調整	外面磨耗する
7	#	#	— (3.6) — 2.0	#	外面 叩きをハケ消し 内面 ナデ	
8	#	#	— (3.2) — 1.8	小型鉢底部 小さな突出する平底	外面 ナデ 内面 ハケ調整	
9	#	#	— (4.5) — 1.4	小型鉢底部 小さな平底	外面 叩きをハケ消し 内面 ナデ	
10	#	甕	— (2.8) — 4.1	甕底部 小さな平底	外面 ハケ調整 内面 ナデ	
11	#	鉢	— (3.2) — 2.2	小型鉢底部 やや突出する小さな平底		磨耗する
12	#	甕	— (3.3) — 2.8	甕底部 小さな平底	外面 叩き 内面 ナデ	
13	#	鉢	— (2.7) — 2.7	小型鉢底部 突出する小さな平底	外面 叩き 内面 ハケ調整	
14	#	#	— (3.5) — 2.8	小型鉢底部 小さな平底	#	
15	#	甕	— (6.5) — 2.3	甕底部 小さな平底	外面 平行叩きをハケ消し 内面 ナデ	

第3表 出土土器観察表(3)

検査番号	遺構番号	器種	法量 器高 胴径 (cm) 底径	口縁 部 (cm)	形態・文様	手 法	備考
22-16	ST-2	甌	— (12.2) — 2.4	— — —	腹底部 丸底に近い	外面 叩き 内面 ナデ	
17	#	#	(6.7) — 3.1	—	#	外面 叩きをハケ消し 内面 ナデ	
18	#	#	(12.2) — 2.4	— — —	腹底部 小さな平底	外面 上部は平行、下部は右上りの叩きとハケ消し 内面 ハケ調整	
19	#	#	(10.0) — 4.0	—	#	外面 平行叩きに右上りの叩きが混る、ハケ消し 内面 指ナデ	
20	#	#	(10.4) — 3.2	—	#	外面 上部は平行、下部は右下りの叩き 内面 指ナデ	
21	#	壺	(9.0) — 6.5	— — —	腹底部 平底をもつ	外面 ハケ調整 内面 指ナデ	
22	#	#	(6.6) — 4.5	—	#	外面 右上りの叩き 内面 指ナデ	
23	#	#	(10.2) — 6.0	—	#	外面 ハケ調整 内面 ハケ調整に指ナデ	
24	#	#	(8.2) — 5.2	—	#	外面 叩きをハケ消し 内面 指ナデ	
25	#	#	(11.0) — 7.0	—	#	外面 右下りの叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	
26	#	#	(10.1) — 4.3	—	#	外面 右下りの叩きをハケ消し 内面 ハケ調整に指ナデ	
25-1	ST-3	甌	18.6 (3.3) — —	— — —	やや外反し直線的に開く	外面 右下りの叩き 内面 ハケ調整	
2	#	#	16.0 (3.5) — —	— — —	直立する口縁部、縫部はナデにより面をなす	外面 ハケ調整 内面 ナデ	
3	#	鉢	(6.4) — 2.2	— — —	小型の鉢底部 小さな平底	外面 ハケ調整 内面 ハケ調整	
4	#	壺	22.0 (2.7) — —	— — —	大きく外反し開く 口縁端部を拡幅し上面に粗い 横描波状文がみられる	外面 ハケ調整 内面 ナデ	

第3表 出土土器観察表(14)

掲出番号	遺構番号	器種	口縁 器高 法量 (cm) 底径	形態・文様	手 法	備考
5	ST-3	甌	12.4 16.0 — —	くの字状に屈曲する口縁部 舟形の底部 小さな平底をもつと思われる	外面 平行と右上りの叩き口 縁部はハケ消し 内面 口縁部にハケ調整、以下ナデ	
6	#	鉢	(5.6) — 3.0	小型の鉢 小さな突出する底部	外面 ハケ調整 内面 ナデ	
7	#	甌	(7.7) — 4.0	甌底部 平底をもつ	外面 平行叩き 内面 指ナデ	
8	#	#	(9.0) — 2.6	#	外面 叩きをハケ消し 内面 ナデ	
9	#	鉢	12.0 5.9 — 2.4	小型の鉢 小さな平底	外面 叩きをナデ消し 内面 ハケ調整	
10	#	#	11.6 (5.0) — —	小型の鉢 口縁底部はやや外反する	外面 叩きをナデ消し 内面 ナデ	
11	#	#	17.6 6.8 — 4.9	やや大きい平底	#	
12	#	#	22.2 6.1 — —	突出する丸味をおびた底部	外面 ナデ 内面 ハケ調整を指ナデ	
13	#	匙	全長7.7 全幅3.7			
14	#	筋鍔車	全高2.9 全幅3.9	穿孔がある	ヘラ磨き	
26-1	ST-4	壺	2.4 (1.7) — —	大きく外反し開く 口縁底部をナデによりやや拡幅する	内・外ともにハケ調整	
2	#	#	2.2 (4.7) — —	直立する颈部から口縁部は水平に延びる	#	
3	#	甌	17.8 (4.6) — —	くの字状に屈曲し、やや外反する	外面 平行叩き、口縁部ハケ消し 内面 ハケ調整	
4	#	#	14.0 (2.4) — —	直立する口縁部 端部はナデにより面をなす	外面 ハケ調整 内面 ナデ	
5	#	#	10.8 (7.9) — —	やや外反ぎみに直立する 口縁部	内・外ともにハケ調整	

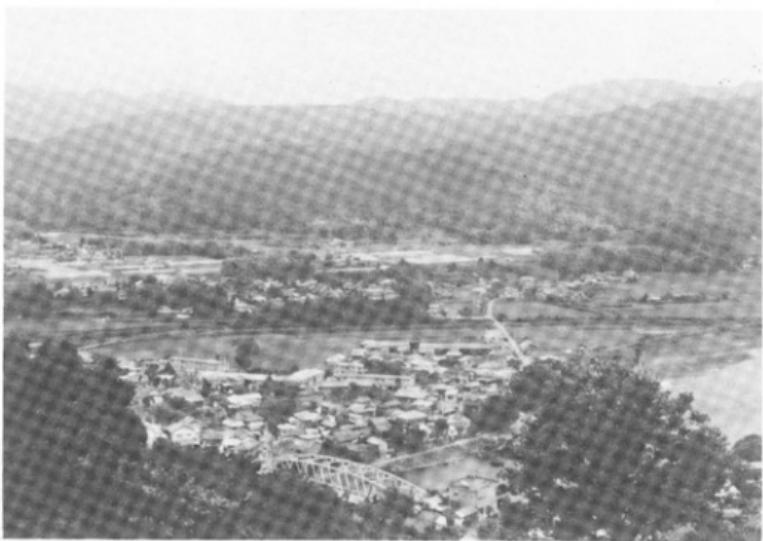
第3表 出土土器観察表(5)

標図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胸徑 底径	形態・文様	手 法	備 考
26-6	ST-4	甌	13.0 (6.5) — —	やや外反ぎみに直立する口縁部	外面 右上りの叩き 内面 ハケ調整	
7	#	#	— (3.4) — 4.4	平底の底部	外面 右下りの叩き 内面 ナデ	
8	#	#	— (3.5) — 4.0	#	外面 叩きをハケ消し 内面 ナデ	
9	#	#	— (3.5) — 2.8	#	#	
10	#	#	— (6.2) — 1.8	小さな平底	#	
11	#	#	— (6.3) — 2.4	小さな平底 6mmの穿孔をもつ	外面 平行叩き 内面 ナデ	
12	#	鉢	— (8.3) — 9.4	台付鉢 外へ張る粗雑な台部をもつ	外面 叩きをナデ消し 内面 ナデ	
13	#	#	10.8 4.5 — 2.5	小型の鉢 小さな平底 口縁部は内湾する	#	
14	#	#	10.6 4.3 — 1.6	小型の鉢 突出する小さな丸底	外面 叩きをナデ消し 内面 ハケ調整	
15	#	#	9.0 5.2 — 1.6	小型の鉢 突出する小さな平底	外面 叩きをナデ消し 内面 ナデ	
16	#	#	11.4 4.9 — —	小型の鉢 丸底をもつ	外面 叩きをハケ消し 内面 ハケ調整	
17	#	#	9.8 6.7 — 2.1	小型の鉢 小さな平底 口縁部は内湾する	外面 叩きをナデ消し 内面 ヘラナデ	
18	#	#	11.2 6.2 — —	小型の鉢 丸底をもつ	外面 叩きをナデ消し 内面 ハケ調整	
19	#	#	12.1 6.7 — 3.8	小型の鉢 小さな平底をもつ	外面 叩きをナデ消し 内面 ナデ	
20	#	#	14.8 6.2 — 4.0	突出する小さな丸底	#	

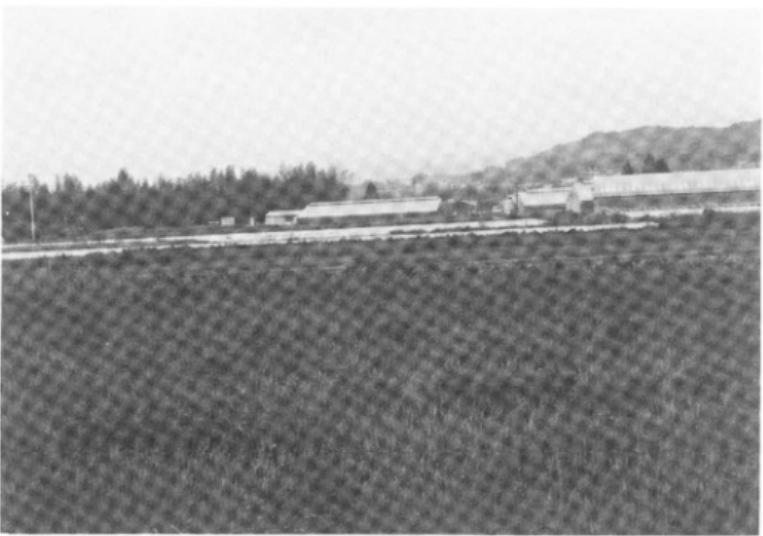
第3表 出土土器観察表(10)

拂団番号	遺構番号	器種	法量 器高 側径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
26-21	ST-4	鉢	17.0 (6.1) — —	口縁端部はナデにより面をなす	外面 印きをナデ消し 内面 ハケ調整	
22	#	#	— (3.9) — 3.3	小型の鉢 突出した小さな丸底	外面 印きをナデ消し 内面 ナデ	
23	#	高杯	14.0 12.1 — 15.8	杯部は鉢に近く、短い脚部から壠部は大きく開く	外面 杯部はナデ。脚部は壠部をナデ、柱状部にハケ、その間をヘラ磨き 内面 ナデ	
24	#	#	— (5.9) — —	やや短かい柱状部 円孔をもつ		磨耗する

図 版



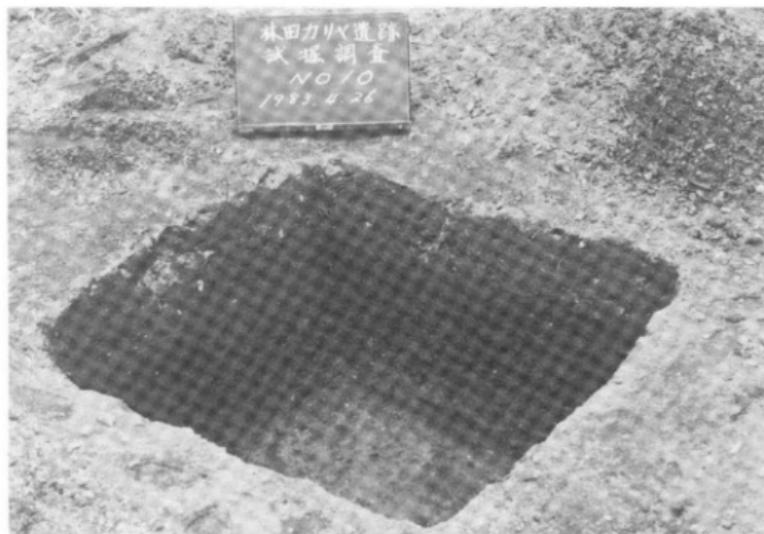
1. 遺跡遠景（西より）



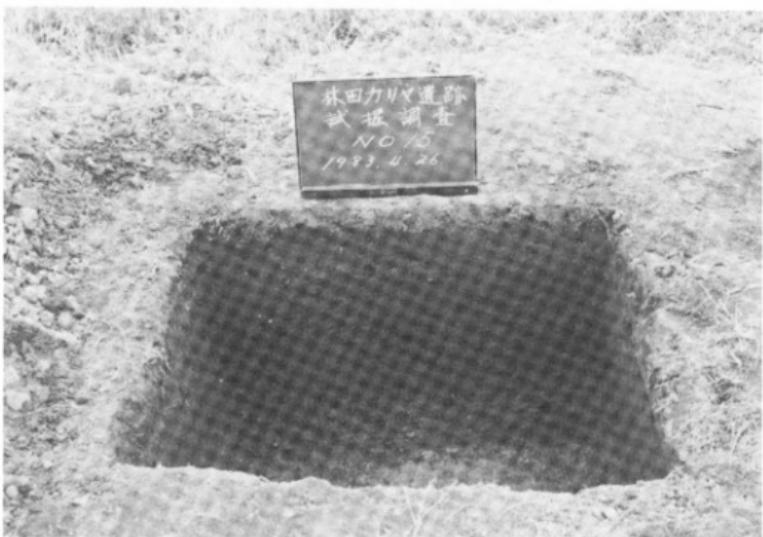
2. 遺跡近景（南より）



1. 試掘グリッドNo.5



2. 試掘グリッドNo.10



1. 試掘グリッドNo.15



2. 試掘グリッドNo.17



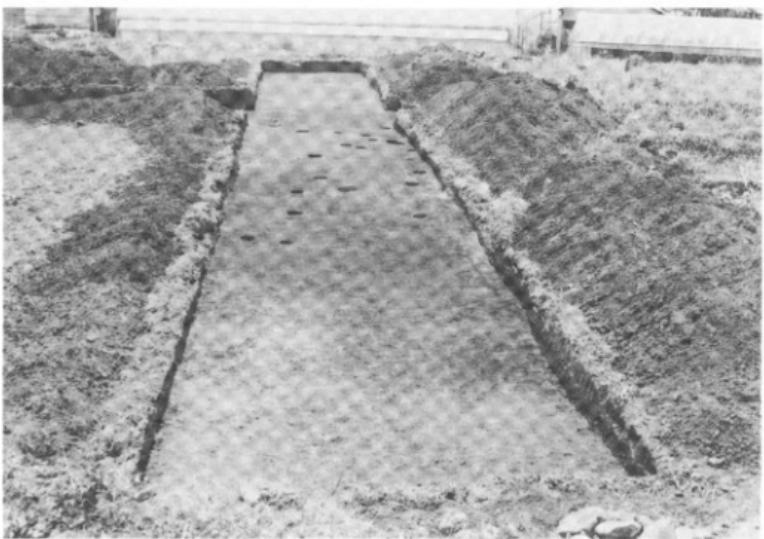
1. 遺跡近景・トレンチ



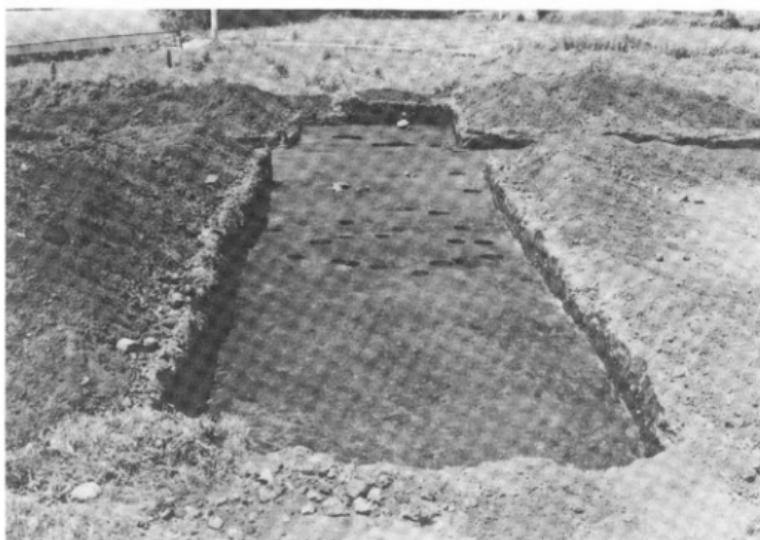
2. 遺跡近景・トレンチ



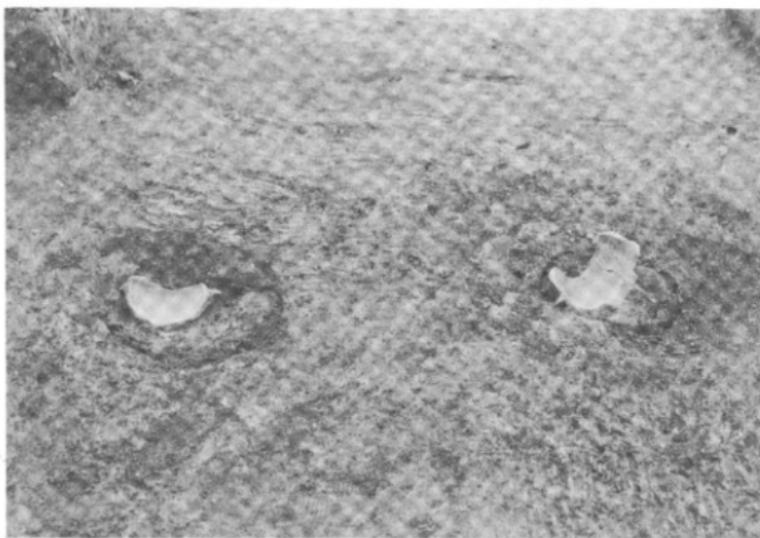
1. A トレンチ遺構検出



2. A トレンチ遺構完掘



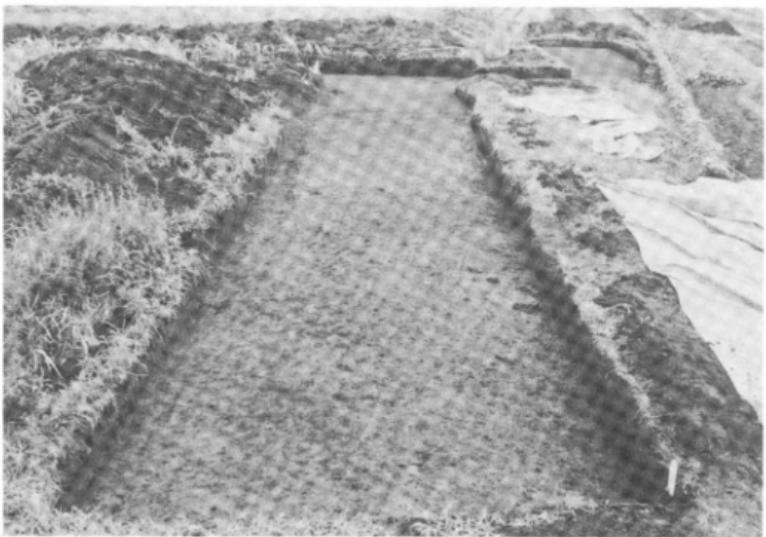
1. B トレンチ遺構完掘



2. B トレンチビット遺物出土状態



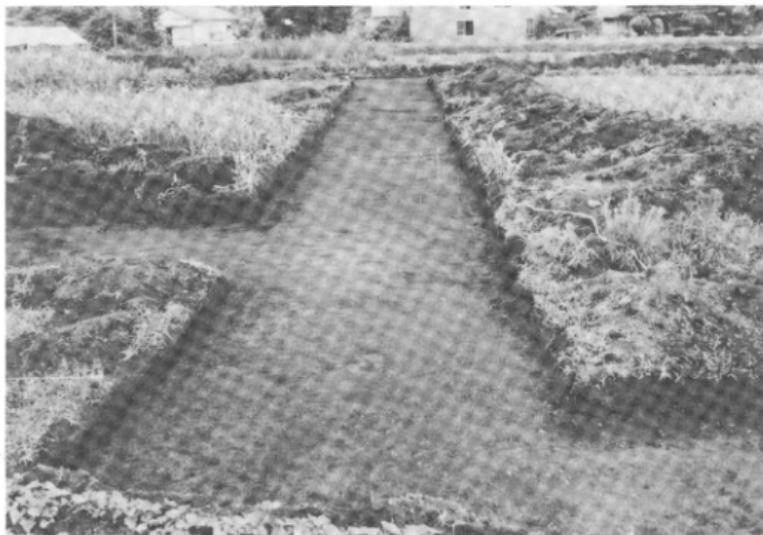
1. A・Bトレンチ全景



Cトレンチ ST-2検出状態



1. Fトレンチ（東より）



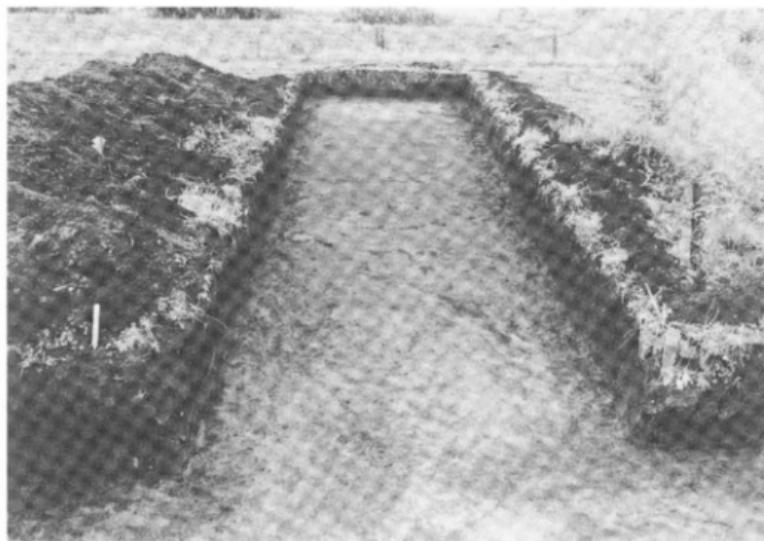
2. Fトレンチ（西より）



1. G トレンチ (北より)



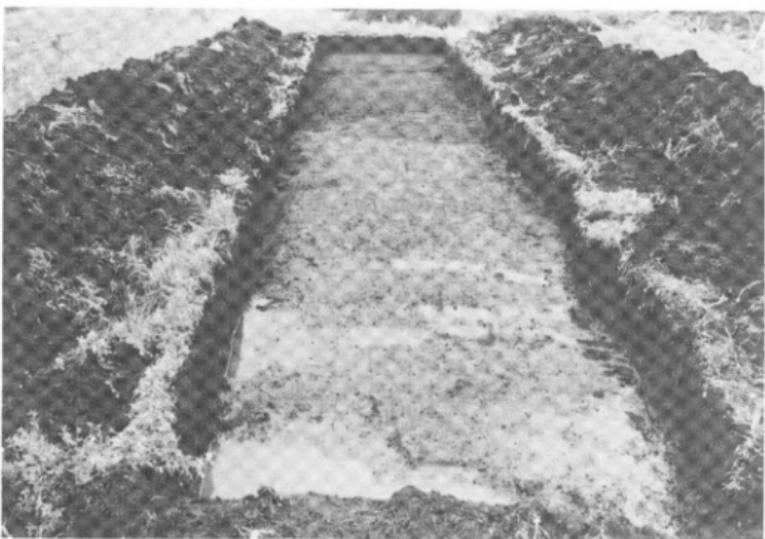
2. G トレンチ (南より)



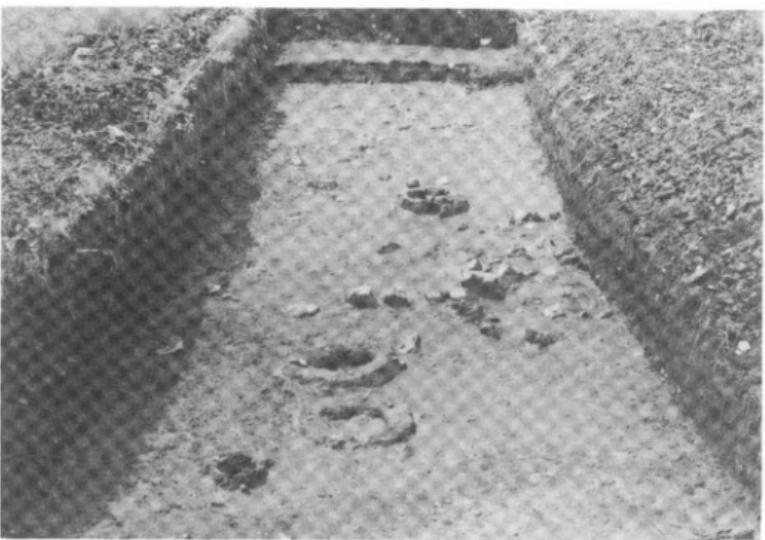
1. Hトレンチ（東より）



2. Mトレンチ（北より）



1. I トレンチ (南より)



2. K トレンチ (北より)



1. Kトレンチ遺物出土状態



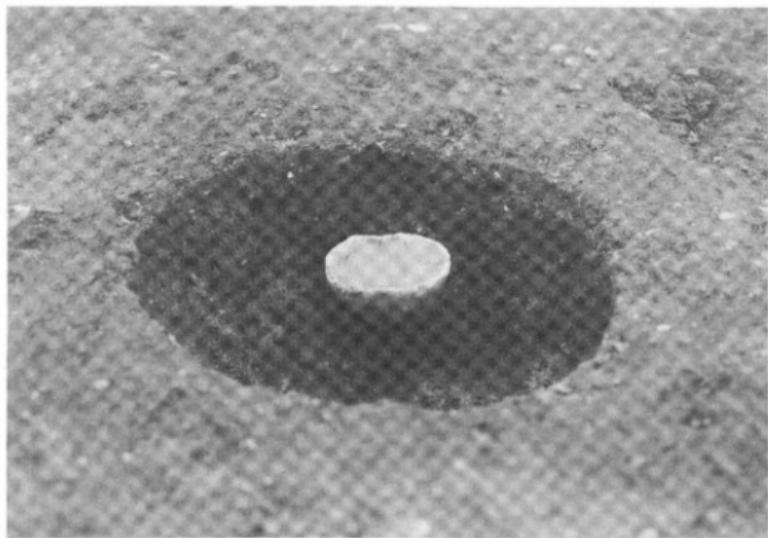
2. Kトレンチ遺物出土状態



1. 第1調査区全景（南より）



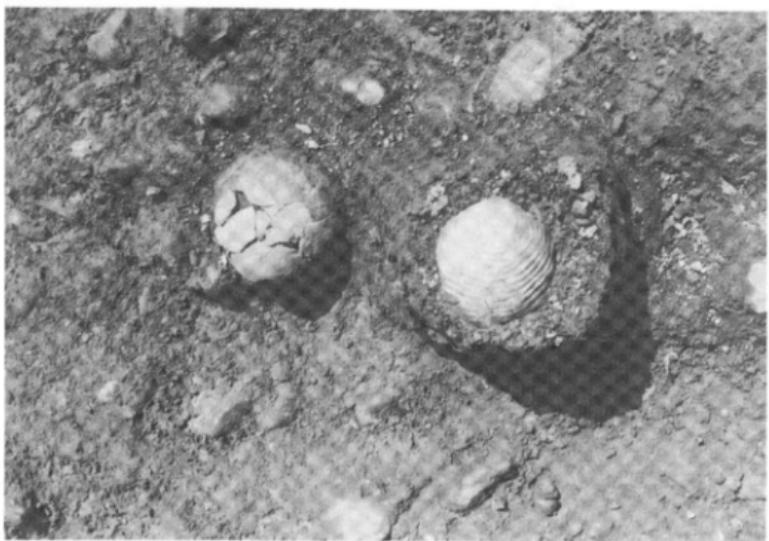
2. 第1調査区ピット群



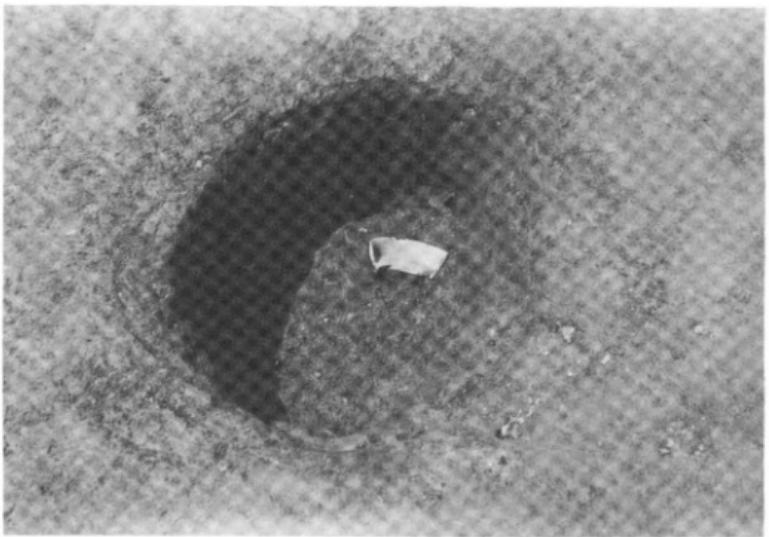
1. ピット遺物出土状態



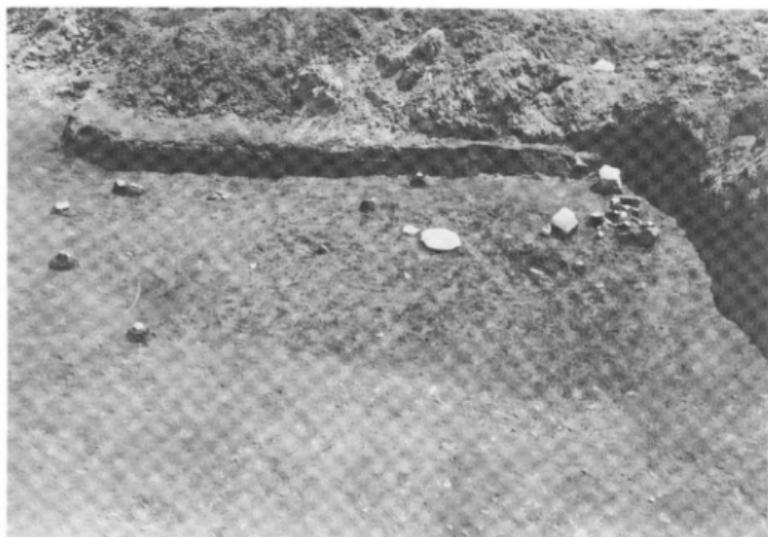
2. ピット遺物出土状態



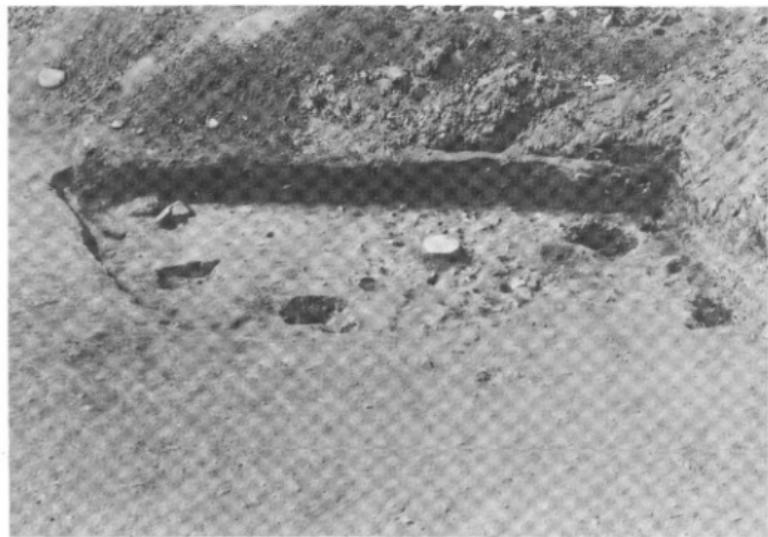
1. 遺物出土状態



2. ピット遺物出土状態



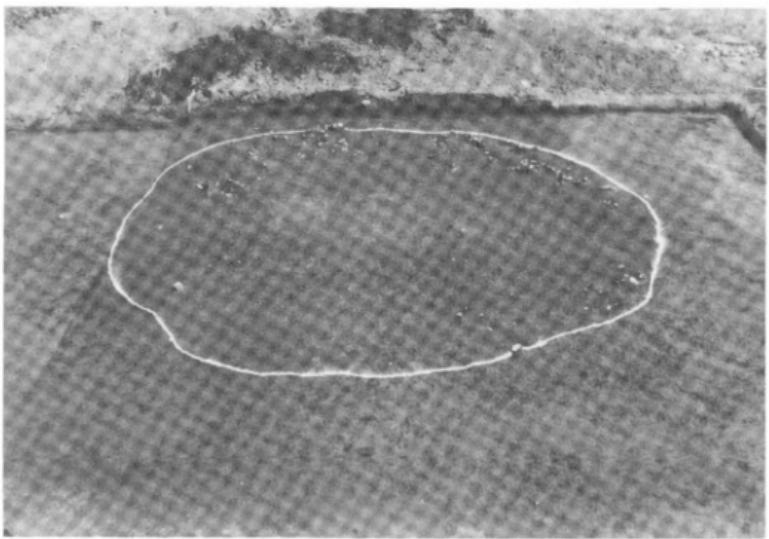
1. ST-1 検出状態



2. ST-1 完掘状態



1. ST-2 調査風景



2. ST-2 掘出状態